言葉は、それが話(放)たれるときに力を持つ。

その言葉が交わされる状況、抑揚、脈絡、さまざまな要因が絡み合い、言葉は相手にある一つの意味という形で撃ち込まれる。

私達が、誰一人として同じ世界を見ていないように、言葉もまた私達の数だけ、意味と、力を持っている。受け止めた意味は共有されない。相手の言葉の真意は誰にも―話し手自身にすらわからない。

同じ言葉を共有することは、できない。

しかし一方で、誰かの見ている世界と、私の見ている世界をつなぐのもまた言葉である――――

さあさあ、大変長らくお待たせいたしました！

平凡な問題学生が繰り広げる言葉遊び系ハイテンションガンアクションストーリー

改め、個性豊かな《言葉遣い》による言霊系ミーニングフルハートフルストーリー？

舞台はタームに、スポットライトは深く、エモーショナルなメロディーに乗せて！

【KOTODAMA　New Term!!】

数ヶ月に及ぶ学校を目指す旅の中で得た多くの出会いは、いったい二人にとってどんな意味をもつのかッ！？

新学期！　新しい言葉！　そして、新たな終わり！？

そんな言弾新章(New term)！　第一弾！

銃身に言葉を込めろ！

疑え！

Your word makes hidden word obvious.

「もう秋だな…」
「うわ、さみー！　葬屋、窓閉めて」
残暑も冷たい風にさらわれ、木の葉もすっかり衣替えをした十一月。主人公こと悼颯火と弔祇葬屋が青少年保護施設・タームにノリと勢いでぶちこまれてからすでに三ヶ月がたとうとしていました。阿部教官にキンディネスに飛ばされた時から数えると、もうすでに半年です。この数ヶ月の間に、二人が喧嘩の流れ弾で壊した母校ことプレイネ地区第六言弾専門学校も修復工事もほぼ完了し、生徒達に平和なスクールライフが戻ってきたといいます。
さて、はじめは毎日馬鹿には付き合ってられないだの、うるさくて疲れるだの、自分を棚に上げた悪態をあきもせずついていた二人でしたが、三ヶ月も居座れば個性派ぞろいのメンバーにも慣れ始め、勉強から解き放たれたタームでの生活をエンジョイしています。今も、もうすでに日が高くなりはじめているというのに、ベッドの毛布に包まってぼんやりするという堕落振りです。
今まではかろうじて学生でしたけど、学籍を剥奪された彼らはもはや制服コスプレのひきニート以外の何者でもありませんね！
「こんなに寒くなるとどこにも出かけたくないな…」
「あーーー…コアラになりたい……」
お前らもう主人公なんてやめちまえよ！
「うにゃぎゃああああああああああああああああアアッ！」
と、そんなたるんだ空気を切り裂くような叫び声とともに、扉を壊れそうな勢いで開け放ち、部屋に転がり込んできたのは、絶叫登場代表格、毒舌少年・頼野琴樹。おそらく故郷の凛ちゃんからであろう一通の手紙を握り締める琴樹の顔は涙でぼろぼろです。相変わらず涙腺の緩い彼ですが、今日は颯火達に八つ当たりするでもなく、部屋に駆け込んできた勢いもそのままに、颯火が寝転んでいるベッドに飛び乗ってき……ええええっ！？
「え、ちょ、こと、はあっ！？」
「嘘だ嘘だ嘘だ嘘だこのやろ僕は認めないぞクソがぁぁああぁぁああッッ！！」
いつもと似たような呪詛を吐き散らす琴樹ですが、どうやら様子がおかしいです。
ではここで一度、普段の琴樹くんを思い出してみましょう！
いつもの琴樹
『僕と同じ空気吸わないでくれる？　気分悪いなあ』
今の琴樹
「うえええ…っ！　颯火ああ…葬屋ああ…っ！　どうしようううう…うぅ…っ！」
→×なんか弱気　　→×さりげない名前呼び　　→×まるで蒼慈
お前誰だよ。
「これはいったいどういうことですか葬屋さん……」
颯火の言葉に、葬屋はすぐそばで布団に顔をうずめて嗚咽を漏らす琴樹に目を向けて静かに一言。

「……フラれたな……」
「……ああ……フラれたか……」
「それ以外理由は考えられないだろ…」
「琴樹がここまで落ち込むなんてな…」
「ああ可哀想な琴樹……ッ！」
「もう泣くなよ、男だろ…！」
「ドンマイ！」
「ガンバッ！」
「違うしっうるさいしっふっふられてなんかなああっ…なあああああっ！」
どうやら、主人公二人のニート生活がスタートする一方で、琴樹君のはかない片思いが砕け散ってしまったようですね…。言弾内の数少ない恋愛要素が一つ消え、元気な学生二人もニートになりはて、活気や華やかさをなくして言弾はどこに向かっていくんでしょう……いやしかし本当に琴樹に関してはご愁傷様としか
「琴樹さん誤解ですううううううううううッッ！！」
と、お葬式ムードをぶちやぶったのは眼帯と長い青のお下げが特徴的な〝中々少年・互井蒼慈。廊下をすべるように現れて、泣きじゃくる琴樹に近づいてくる。
「くるなあああああああああ！！」
「落ち着いてください琴樹さん！　誤解です！　早とちりの勘違いです！！」
蒼慈の姿に顔面蒼白で布団の中に身を隠した琴樹に、必死で訴えかける蒼慈。その手には一通の手紙が握り締められていますが…、おや、なんだか見覚えのある…
「おい、蒼慈、その手紙……」
「え？」
『ご名答――ッ☆』
葬屋の言葉に、癇に障るほど楽しげな声で答えたのは異魂として彼に憑依している兄・霜一でした。彼はあわてる蒼慈の手から手紙を奪い取ると、宛名・差出人欄を葬屋の目の前に突き出して高らかに音読。
『互井蒼慈くんへ　　栖楽歌凛より』
颯火の横で布団巻きになっている誰かさんの動きが止まった。
『そう、なんと、あの某頼野琴樹くんがだいだいだーい好きな愛しの凛ちゃんからうちの蒼慈宛のラブレターでェーす！』
「「えええええええええッ！？」」
「――――――う、」
バタン、と布団の中の琴樹の全機能が完全に停止した音がした。
「うわあああああああ琴樹生きろおおおおッ！」

「おい、ちょっと待てよ！？　なんでそんな展開になるんだよ！？」
『新章はじまったから、少年少女の恋物語も新章に突入したんじゃね？』
「イメチェンのノリで琴樹の生きる意味を奪わないであげてッ！！」
『ンなこと言ったってよォ？　凛お嬢さんから蒼慈宛に手紙が届いたのは事実だしなーァ？　ＴＯ蒼慈、ＦＲＯＭ凛。ほら読めるだろ、トゥーそうじ、ふろむ…』
「やめたげてよおおッ！」
いやみなほどにはきはきと読み上げる霜一に颯火さえも涙目。泣きっ面に蜂どころかＢ２９レベルで瀕死の琴樹に精神攻撃を仕掛けるこいつはまさに外道ですね！
そんな非人道的な兄に、蒼慈が必死で訴える。
「兄さん！　これ以上面倒なことにしないでよ！　まだ中身だって開けてないのに、ら、ラブレターなんて適当なこと言って！　そんなに人をいじめてどうするの！？」
『俺の存在エネルギーにするのさ』
「あ、そっか…」
「折れるな弟ッ！」
「ていうか、中まだ読んでないのかよ！」
『俺の勘がその手紙はラブレターだって言ってたんだよ』
「お前の勘は人を傷つける最善の策を告げる声の間違いだろッ！」

「とにかく！　僕は凛さんと二、三回しかあったことないし…、たいしてしゃべったことだってないんだから、そ、そんな突然恋愛に発展するわけないんですっ！　中を読めば分かるはずです！」

と、兄から手紙を奪い返した蒼慈は袖口から取り出したナイフでパッと手紙の封を切った。

「うわあああああやめて待ってすこし待っていや別に凛がこんなショタに転んだかもしれないとかそういう可能性を真に受けているわけじゃなくて心の準備がっていうか手紙を読まなければシュレーディンガーの猫で状態が並列し存在しているかr」

『黙まって』ください！」

霜一の声色で強く言い放つと、蒼慈はゆっくりと手紙を読み上げた。

蒼慈くん へ

突然の手紙に驚かせちゃ ってごめんね！ (汗)

コトの友達 っていうと思い浮かんだのが蒼慈くんだ ったから…

さ っそくだけど本題に入るね

実は来週末 にコトの誕生日パーテ ィを開くんだけど、タームのみんなもよか ったら来 てくれないかな?

せ っかく コトに新しい友達がたくさんできたんだし、みんなでわ いわいや ったほうがき っと楽しいと思うの！

（コトの手紙にも書 いたけど、き っと コトは恥ずかしが って誘えないと思うから蒼慈くん宛 てに手紙書 いたんだ 笑）

毎年この時期、こ っちではお祭りもや ってて すごく楽しいから是非みんなでキンデ ィネスに来てね！ 待 ってます！

凛 より

……、

琴樹がちらりと自分のところに届いた手紙を開き―コチラも未読だったらしい―中身を確認して、黙りこくった。

「……琴樹、こr」

「うるさい」

「ラブレターっていうか招待状だよn」

「全部忘れろ」

布団からそっと顔を出した琴樹が言い放つ。羞恥心とか驚きとか複雑な気持ちがまぜこぜになって恐ろしいほど真顔になっています。

『ぷ、』

と、こらえきれず噴出した霜一の笑い声がこの微妙な雰囲気と静寂をぶち壊した。

『ヒャハハハハッ！　なにこれ、え、予想斜め上に愉快な手紙じゃねーのォッ！　我らが琴樹君の誕生日パーリィー☆とか行くしかねぇじゃーん！（笑）』
「絶っっ対来んじゃねえええええええッ！！」
『祝い事とかさあー俺と相性最悪の自滅イベントだけどよおー、あの凛ちゃんの頼みっちゃーしかたないよなあー』
「悪霊は無理しなくていいからねッ！？　本当にッ！！　分かって僕の優しさ！」
『琴樹のためなら仕方ないかなァーー？』
「だから来なくていいっていってんだよ聞けこの腐れ外道ォッッ！」
『お褒めに預かり光栄でーす！』
いきり立つ琴樹に大爆笑な霜一お兄さん。明らかに来るなと言われて参加拒否されること請け合いなこの凛ちゃんからのお誘いは、人が嫌がることをしたい霜一にとって願っても無いイベントなのです。

本当この人、人の嫌がることをしているときが一番輝いてますよね！

一方手紙を読み上げた弟の方はというと、
「ぼ…ぼく、お、お友達って…！　琴樹さんのお友達って……！」
別のところに感動を覚えたまま時が止まっていました。

若干十四歳にして天涯孤独の身の上である蒼慈くんはお友達というワードに弱いのです。いやはや、琴樹にとっては恐ろしい殺傷力を持つ凛の『友達』も、時には人の心を救う時もあるんですね！
「ていうか、タームの奴らを故郷につれてくなんて死んでもごめんだからねッ？！　しかも誕生日祝いとかせっかくの記念日を何でわざわざお前らみたいな下衆と過ごすとか溝鼠とテーブルを囲むようなもんだっつーのッ！　来るなッ！　いい？　絶対来ないでよッ！？」
「それはフリと受け取っていいのか、琴樹」
「もーそう照れるなってー琴樹ーっ！　実はちょっと来てくれたら楽しいかも…とか思ってんだろ？」
「ハ？」
颯火の言葉に心底嫌そうな顔をする琴樹。顔がマジです。
こいつにはこの三ヶ月の間に培った友情とかないのか…
「誕生日は毎年凛の家族と僕ん家でお祝いするっていう神聖なイベントなんだよ！　凛が僕のことをいつも以上に素敵な笑顔で祝ってくれる日なんだよわかるッ！？」
「でも、その凛ちゃんから招待状が来ているわけで」
「う、」
「凛ちゃんは手前の誕生日を精一杯祝ってあげようとおもって、友達を誘おうとしたっていうのに、手前はその思いを無碍にするっていうのか…ッ！」
「う…でも…」

葬屋と颯火につめよられて琴樹もついたじろぐ。
「お前は、凛ちゃんがくれるプレゼントを嫌いなものだからって捨てたりするか？」
「するわけないじゃん」
「俺達に『来るな』っていうのはプレゼントを捨てるようなもんなんだぞ…ッ！」
「それでもお前は俺達を連れて行かないつもりか…ッ！」
「うううう…！」
『相変わらずお前らこういう屁理屈だけは上手いのな』
愛と憎しみの狭間で葛藤する琴樹。凛を世界の何よりも優先する琴樹にとって、凛の申し出を断ることはアイデンティティの崩壊に近いのです。そこを狙ってついてくる颯火と葬屋も、霜一に負けず劣らず琴樹の誕生日会に行きたいと見えます。
「琴樹さん……、僕、琴樹さんの誕生日、お祝いしたいです…っ！」
と、そこでおずおずと手を上げた蒼慈は、真剣な面持ちで琴樹に訴えかける。
「だって、琴樹さんもタームの仲間じゃないですか…っ！　琴樹さんは嫌かもしれないけど…でも…僕達は琴樹さんのこと、大事な友達だと思ってるんです…ッ！　いつもは迷惑しかかけられないけど、こういう時くらいお祝いさせてください！」
「……な、なんだよ急に……」
手紙を握り締めて、輝くまっすぐな瞳で語る蒼慈には、流石の琴樹も冷たく切り捨てることもできずに目をそらしてしまう。さっきまで楽しそうに騒いでいた霜一も、蒼慈のきれいな言葉にダメージをうけ、影で体を丸めてうめき苦しみ静かです。
「この前の僕の誕生日、みんなに祝ってもらって、僕、泣きそうなほどうれしかったんです。みんなで騒いではしゃいで…、ちょっと疲れるけど、僕はそういうのが素敵だなって思うんです…。だから、琴樹さんのお誕生日もみんなで祝いたい…！」
「……、」
「なので、僕、この手紙、ゼペットさんに見せてきますね！」
「……、ん？　え？」
蒼慈のいい話に黙りこくっていた琴樹も蒼慈の不穏な言葉に我に返った。
「ほら、颯火さんや葬屋さんだけじゃなくて、みんなも琴樹さんのことお祝いしたいはずですから！」
「え、や、」
「ゼペットさんに言って、みんなに誕生日会のことを伝えないと！」
「あ、あ。いや、いやちょっと待、」
琴樹が引き止める前に、蒼慈は風のように部屋を飛び出していってしまった。
『で、でかした！　流石っ、俺の弟ッ！』
「チョロイですねッ！」
霜一のかすれた声と蒼慈の勝ち誇ったような声が廊下の向こうに消えていく。

一瞬の沈黙。
「し、しまったあああああああああああッ！」
頭を抱えて叫ぶ琴樹を横目に、葬屋と颯火は静かにハイタッチし、思うのであった。
蒼慈、ＧＪ、と…。

И

レンガ造りの駅に時代錯誤な機関車が停まっている。古びた、しかし汚さを感じない情緒ある駅は人気がなく、時間がゆっくりと流れているようだ。
「はーっ、久しぶりのキンディネス！」
颯火はうーんと伸びをして、深呼吸。都会のにごったソレとは違う、澄んだ空気が胸を満たす。見渡すと、鮮やかな緑、済んだ空の青と深い海の藍。少し先には町をなす家々の赤とそれを囲む城壁が見える。駅のある小高い丘にはさわやかな風がゆっくりと通り抜け、咲き誇る花々と白い機関車の煙を揺らしている。
キンディネス。思いやりの国、あるいは、大陸偏狭の理想郷と呼ばれるこの国は、砂漠と深い森や大きな山脈に囲まれ、他の近代的な国からは隔離された場所にあるため、近代技術はほとんど普及していない。しかし、その雄大な自然と穏やかな国民性は、都市の人々が忘れかけた何かを思い出させてくれるようでもある。
「前はゆっくりしてられなかったけど、やっぱここはいいな、葬屋」
「ああ…、心が洗われるな、颯火」
コンクリートジャングル育ちの二人にとって、まるで絵画のようなキンディネスの風景は、まさに絶景としかいいようがありません。いつものようにお互いを茶化したりせず、ただ静かに息を飲むばかりです。
「ったく、まんまと一杯食わされたとしか思えない…クソが…ッ！」
そんな楽園出身者とは思えない琴樹くんは重いため息をついて荷物を担ぎなおした。

「誕生日会か、いいんじゃないかな？」
手紙を読んだゼペットは楽しそうに微笑んで言った。
結局あの後、悪言による琴樹の悪あがき、もとい追跡を得意の脚力で逃げ切った蒼慈は、朝食の用意をしていたゼペットに誕生日会兼キンディネス慰安旅行の件を申告。全員がそろう朝食会で、参加者を募ることになった。
「あ、でも、全員出払っちゃうと何かあった時に困るから、各班二、三人ずつ残ってくれるかな？　それだったら、出かけてもいいよ」

「ハッピーバースデー！」「トゥーコトのんーッ！」
「俺達誕生日会行きたいー！」「キンディネスに遊びに行きたいーっ！」
誕生日企画に真っ先に名乗りを上げたのは、タームの宴会部長ことハイテンギタリスト・音斬兄弟。クリスマスだの節分だの、季節行事では何かと周りを巻き込んで騒ぎまくる双子がこんな楽しげなイベントを黙って見過ごすわけありません。
「うーん、琴樹君はもちろんだけど、あと蒼慈くん颯火くん葬屋くんは行くとして…。あと、いざって時のために爆くんも一緒に行って、面倒見てくれるかな？」
「別に俺はいいが、頼野はどうなんだ…？　俺はあまりこいつと親しくないし…」
「もういいよなんでも…」
あきらめ気味に言う琴樹は、ニコニコ顔で事の成り行きを見守っている蒼慈を憎憎しげににらみつけ、がっくりと肩を落とした。残念ながら、もうここまで事が大きくなってしまった以上、いくら琴樹がわめこうと計画は停まりそうにありません。
蒼慈、完全勝利。
「爆が行くなら、代わりに僕は留守番するよー。祝い事とか得意じゃないしねー」
そう、ひらひらと手をふり麗斗はいつも通りの笑顔で申し出た。一見、空気を読んで遠慮したようにも見えるが、この冷徹ネガティブ麗斗くんのことです、そのさめた心の内では『どうせ死ぬのに誕生日祝いとか…（笑）』と思っていることでしょう。明らかに祝福ムードをぶち壊すこと間違いなしです。連れて行かないのが無難ですね。
「研究科は由卯ちゃんがいるから、まあいいかな。皐月ちゃん達はどうする？」
「私も久々に出かけたいので参加を希望するっ！　二人はどうする？」
皐月の問いかけに鋭利と鶯は顔を見合わせた。連行班は皐月、鋭利、鶯の三人。どちらかが留守番しなくてはなりません。
鶯は無表情のままうつむいて黙り込んでしまった。どうやら参加を辞退するつもりらしい。無表情無反応な自分では場を盛り下げてしまうとでも思ったんでしょうか…。
一方、いまいち話の流れがよく分かっていない鋭利はそんな鶯に首をかしげながらも、うつむく鶯をみて、ぽん、と手をたたき、
「……あ」
すっと鶯の手を、鋭利が無理やりあげさせた。
「……？！」
「鶯行きたいんでしょ？　僕なんかに遠慮しなくていいんだよー！　由卯ちゃんと水鳥ちゃんの面倒は僕がみとくからさ、楽しんできなよ！」
鋭利はそういって笑うと、鶯の頭をわしわしとなでた。基本的に空気の読めない空耳勘違い男である鋭利も、たまに年甲斐の勘で鶯や由卯の心の内を察して気遣ってやることもあるのです。だから、なんだか憎めないんですね。

鶯は少しの間口をぱくぱくさせていたが、少しあわてたようにぺこりと頭をさげた。そして、皐月に向き直りうなずいた。
「じゃあ決まりだな！　鋭利、かたじけない」
「片付け台？　そんなのあったっけ？」
「そんなことを言ったわけではない」
「ソースは粉を炒った豆でパない？」
「もういいわッ！」
ただ、スーパーいいお兄さんモードは五分が限界です。
この施設内に、ただのいいやつなんていない。
「えっとそうなると、音斬くん、君達にはどっちかに残ってもらいたいんだけど…」
「「えええええええええええええーッ！？」」
ゼペットの言葉に両手片足を上げて小躍りなうな状態のまま一時停止して愕然とする双子。キンディネス旅行への募らせていたわくわくやうきうきは行き場を失い、二人して目を見合わせる。
「一緒に行けないって、どうする？」「どっちが一人しかいけない…どうしよう…」
「ら、雷人いってきなよっ！」「風刃がいってきなってば！」
「俺雷人と一緒じゃなきゃやだよ！」「俺だって風刃と一緒がいいよ！」
厳しい顔を突き合わせて肺活量の続く限りうーんと唸ると、二人はうなずいて、
「「お留守番しますうう！」」
ビシッと手をあげて宣言した。一番行く気満々だっただけに苦渋の決断です。
というか、双子には個人行動って言う選択肢は存在しないみたいですね。
二人で一つ！
そんな音斬に申し訳なさそうにごめんね、と言って、ゼペットは全員に向き直った。
「それじゃあみんな、何かあったら助け合って仲良く、がんばるんだよ？」

そんなわけで、キンディネス旅行の決まった八人―琴樹、颯火、葬屋、蒼慈、霜一、鶯、皐月、爆―は、新幹線や夜行列車を乗り継ぎ、二日かけて大陸を横断。ようやく、キンディネスの都市部にある唯一の駅にたどりついたのだった。
「おおおおおおおお！　おおおおおお！」
「おおおおい！　すごいぞ！　鶯！　すごいぞ！」
キンディネスの絶景を前に、同じような感動の仕方をする爆と皐月。その間に挟まれる鶯も無表情ながらも、どことなく表情がおだやかです。颯火と葬屋はいつの間にかカメラや携帯を取り出して記念写真を撮り始め、蒼慈を巻き込み大撮影会を決行中。写メの『ピロリーン♪』という軽い音が繰り返し静かな駅に響いている。

いやはや早速キンディネス満喫しまくりですね。
ところで、何しに来たんだっけ？
「そのままキンディネス観光だけして帰れよ…」
浮かれ騒ぐ一行に、あきれたようにはきすてる琴樹。
念のため確認しますが、一応、メインは琴樹の誕生日です。
「まーまー、そう拗ねるなよ琴樹～！　一緒に写真撮る？　葬屋―写真とってー」
「あ、あの、ぼ、僕も一緒に写真撮りたいです！」
『よっしゃ、心霊写真にしようぜ！』
「お断りだよ！　勝手に撮ってろ！　お前らと一緒に写真なんか撮ったら嫌悪で体が腐り落ちるっつーの！　一人でとって、そのまま写真に封印されろ悪霊めッ！」
「…なあ、お前本当にキンディネス出身なの？」
「生まれも育ちもキンディネスですがなにか」
葬屋の問いに即答する琴樹は、心が現れるような美しい自然を背景に、思いやりのおの字も感じられない不機嫌そのものといったご様子。この景色の中で三日も過ごせばどんな悪人も隣人愛に目覚めそうだというのに、何を間違えたらその性格になるのか、キンディネス七不思議に登録してもいいと思います。
「というか、いちいちこれくらいで騒いでないで、さっさと行くよ」
「これくらい、だとッ！？」
荷物を再び背負いなおし、ため息をつきながら言う琴樹に、爆がものすごい形相で振り返る。
「頼野！　そうやって周囲に無関心で、感動することを忘れていると、心が貧しくになってしまうぞッ！　もっとゆっくり、立ち止まって、日常の中の小さなことに目を向けるんだ！　それをしてこなかったから、お前はそんなに性格がゆがんでしま――」
「そんなことより記念撮影しようぜ！」
颯火の言葉で爆のお説教タイム強制終了。
そんなことよりではじめればどんな文脈もぶち壊せるとは便利な言葉ですね！
「悼ィ……ッ！　人が話しているのを邪魔するとは…ッ！　失礼だぞ！」
「お前の話はいちいち長いし面倒くさいんだよ！　この説教マニア！」
「そうだ！　貴様の長台詞の所為で私の話す時間が削られてしまうだろう！　少しは自重しろ！」
「皐月、お前もな！」
「それに、これは直々に頼まれてるんだよ、な、葬屋？」
『『爆のお説教はほうっておくと数時間単位で話し出して面倒だから、早めにカットしておいたほうがいいよー』とのことだ」
「麗斗のことかあああああッ！」
「俺、麗斗の代わりに、必死で爆のこと止めようと思って…ッ！」

「麗斗はお前の相棒だろ、その遺志を尊重しなくて、どうするんだッ！」
「俺の相棒勝手に殺すな！」
「お、おい、葬屋！　何余計なこと言って…っ！」
「し、しまった…ッ！　ついうっかり…ッ！　いや、違うんだ、爆、今の誤変換というか…」
「なんだその意味深な会話は」
「しらんのか、爆。鶯情報によれば雪田麗斗は先日未明…何者かに殺害されているのだッ！」
「な、なんだとおおおおおおおッ！　本当なのか鶯ッ！」
「……！？　……？？？　…？」
颯火葬屋に加えて、悪ノリしだした皐月に困惑する爆、と鶯。
お前ら、人の死ネタで盛り上がるなよ。
ちなみに、タームの麗斗君はもちろん元気で、さきほどからしきりにくしゃみをしているので花粉症の疑いをかけられているらしいですよ！　はた迷惑！
「は、犯人は誰だああッ！　許さない！　俺の親友を手にかけたやつはゆるさない……ッ！」
「あわてるな、爆。この名探偵柏皐月にかかれば一網打尽よ！　そして、犯人はこの中にいる！」
「…あのさ、皐月、サスペンスドラマ好きなの？」
「ふ、愚問だな、颯火。火曜の夜はサスペンスと相場が決まっているのだよ！」
「よし、じゃあ、これから調査をするから、みんなその場を動くな。そしてこっち向け。ハイチーズ」
カメラを取り出した葬屋に、みなそれとなくブイサイン。
シャッター音。
「……って、ツッコむ隙を与えない流れるような記念撮影！　そこにしびれるあこがれる！」
「ちなみに、この写真でカメラ目線になっていないやつが犯人だ」
「そこは適当なんだな、葬屋」
「あ、鶯、目をそらしてる」
「！？」
「お、お前かあああッ！」
「……ち、ちがう……！」
「おい、違うらしいぞッ！」
「爆くんはもっと人の言葉を疑いましょう！」
「それでは鬼神百機ではないか！」
「何その無双状態！　疑心暗鬼だよこのボキャ貧！」
「……ん？　じゃあもしかして、麗斗が死んだっていうのも…」
「嘘だ、まただまされたな」
「全然気づかなかった…！」
「暇をもてあました」

「しかし、冗談とはいえ仲間を殺して愉しむとは、不謹慎きわまりないぞッ！」
「おいそこは神々の遊びって続けるとこだろうそして説教割愛！」
「颯火、爆にそういう高等技術を要求しても無駄だ」
「……、」
「ん？　どうした鶯何かよう、かあああああああああああッ！？」
皐月の叫び声に何事かと鶯が指差した方を見ると、すでに駅を出て街へ向かっている琴樹、と後ろを振り返っておどおどしている蒼慈。
……。
ＴＨＥ☆置いてけぼりっ！
ちなみに、琴樹君はさっきの「行くよ」の後から出発していました。
「おい琴樹待てこらあああああああああああああああああああッ！」
一方、バックに颯火達の静止の声を聞きながらもガンスルーで歩を進める琴樹くんはというと、
『オイオイ、少年――！？　さっきからやけに静かだなァ？　どっかの無口君の真似か？　それとも愛しのリンちゃんとの再会シュミレーションで忙しいのかァ？　え？　どうした？　おい？　こら？　こーとーきーーー』
「うるさい…」
『反応薄……』
霜一も興ざめするほどのテンションの低さを誇っていました。しつこくチャカす霜一にもこの反応で、ものすごい口論をしながら追ってくる主人公達にもツッコミなしと、完全に省エネモードに入っています。
『リアクションが面白いところだけは俺琴樹のこと評価してたのに…調子狂うわ…』
「少し黙ってなよ…」
『覇気がねぇよ覇気がッ！　もっと口汚く文字にするのもためらわれるような言葉で罵れよッ！』
「人の悪意を感じない清らかな場所に来て力が足りないのは分かるけど兄さん落ち着いてッ！」
「なんかもう疲れた…」
「琴樹さんもいつもみたいに元気出してくださいよおおおおおっ！」
「黙れショタ」
「いつもどおりッ！？」
『くそー、しかもこの後あの善意の塊みたいなリンって子が来るんだろ？　死ぬわ…、今回は琴樹が暴言はいてくれるからいけると思ったけどよォ…やっぱキンディネスは鬼門だわ…うぐ……』
「うわあああああ兄さああああああんっ！　兄さんと一緒がいいよおおおおおッ！」
「……リン、」
ふと、琴樹の瞳に光が戻った。
「そうだ、リン、もうすぐリンに会えるんだッ！　あああああリンーーーーーーーッ！」

そして、急にハイテンションになったと思ったら、リンダリンダを歌いながら駆け出した。
はい、これが末期症状ってやつです。
ここに病院を建てよう。
「……あれ？」
「ちょ、琴樹いいいいッ！　待てってていってんだろおおおッ！　《焼死千万》ッ！」
もう少しで追いつこうというところで、逃げるかのように走り去る琴樹についには銃を乱射し始める颯火。それに続いて駆け抜けていく葬屋、爆、皐月。
立ち上がる土煙の中、呆然としたまま取り残された蒼慈は、あわてて一行の後を追うのでした。
そんなわけで、そろそろあの方にご登場願いましょう！　では、どうぞ！

「コトーっ！」
入国ゲートに入ってすぐの広場の真ん中、輝く噴水をバックにまぶしい笑顔をたたえて手を振っているのはもちろん、僕らのアイドル凛ちゃんです。城壁をくぐった一行を出迎えてくれたその太陽のような笑顔に、さっきまで死んだ魚の目をしていた琴樹も満面の笑みを浮かべ、手を振り返す。
「リンーっ！　ただいま！」
「おかえりいーーっ！」
そんな琴樹を見るなり、リンは言いながら駆け寄ってきてそのまま、
抱きついた。
「まおわおうをあッ！？」
突然のスキンシップに荷物を取り落として奇声を上げ混乱する琴樹にもかまわず、リンは素直に再会を喜んでいるようで、
「うわー、もうほんと久しぶりーっ！　何ヶ月ぶりだろう？　もうずっとコトに会ってなかったみたい！　元気にしてた？」
「えっ、あ、うん、うん！　元気！　元気になった！」
「そう、よかったあー！」
「リンも、元気そうで、よかった…！」
抱き返すこともできず行き場をなくした手を硬直させたまま、琴樹はそう返すのが精一杯の様子。
ただ、ここに来るまでにツッコミ等々で削られまくり、禁断症状起こすほどだった琴樹のヒットポイントも完全に回復したことでしょう。
幼馴染ポジションのおいしさを再確認しますね。
「くそおおー！　俺もかわいい幼馴染がよかったーっ！」
「お望みなら再会のハグくらいしてやるけど、颯火？」
「お断りします」
「ていうか、あれ絶対、琴樹男あつかいされてないだろ…」

まあ、確実に友達どまりの扱いですね。南無阿弥陀。
「ぐ……リア充爆発しろ……っ！」
「爆が言うとしゃれにならないからやめてっ！」
「てか、爆があーいうのに興味とかあるんだなー」
「なっ、あっ、ああ、い、いや！？　別に興味などないッ！　これっぽっちもない！ば、場をわきまえろということだ！　見ているこっちが恥ずかしいっ！」
葬屋の言葉に、真っ赤になって全力否定する爆。変に真面目なので、こういういちゃいちゃ（※見た目だけ）した雰囲気には照れてしまうんでしょうかね？
しかし、皐月と鶯が仲良くしてても何も言わないのに、凛の場合はこの反応とは…、爆の中で皐月がどんな扱いかが垣間見えるようです。
「いやー、本当若いっていいわねぇ！」
「あ、嬉津枝（きつえ）さん！　楽揮（よしき）さん！」
「あははは―、迎えにきちゃった」
と、大きな荷台を引きずる通りすがりの女と男の声に、凛は振り向いて会釈をした。
「お店、空けちゃって平気なんですか？」
「大丈夫、まだ誰もきやしないよ！　それにちょうどいきつけの問屋が来たもんだから、買出しにいかないといけないわけよ！」
「それに、久しぶりに琴樹に会いたかったから、ちょっとだけ寄り道したんだ」

豪快に笑う女はいかにもオカンといった雰囲気で、キッとつりあがった眉が勝気そうな印象を感じます。一方横で柔和に微笑む男は、女とは対照的に糸目と猫背でなんだか腰が低そうですが、どことなく紳士的です。格好からして地元の商人のようで、引いている荷台にもさまざまな商品が並んでいました。

「ん？　琴樹、知り合い？」

「ああ、母さんと父さんだよ」

「は、」

え？

即答した琴樹に、質問した側の颯火が硬直し、思わず聞き返す。

「お、親子…？」

「そうだけど」

「え、ちょ、ま、親子とか、え、嘘――――」

その後の言葉を颯火はぐっと飲み込んだが、その場にいる全員が同じことを思っただろう。

全然似てねぇッ！

女―嬉津枝さんの黒髪くせ毛とモスグリーンの瞳には血のつながりを感じますが、それ以外に共通点が見あたりませんし、お父さんであるところの楽揮さんは、その柔和な雰囲気が息子にはまるで遺伝しておらず、琴樹との血縁をカケラも感じられません。ドッキリや出生の秘密を疑うレベルと言っても過言ではありません。

快活で豪快な母と柔和で温厚な父がありながら、どうしてこんなひねくれものができるのか…

やっぱり琴樹は一回戸籍を確認したほうがよさそうですね。

そんな一行の複雑な心中にも気づかず、琴樹ママは笑って言う。

「しっかし、今回はうちのバカ息子のためにこんなド田舎まで来てもらって悪いねえ！　ま、ここにはここの、都会さんとは違ういいところがあるから、ゆっくり楽しんでいくといいさ！」

「本当、みんな、無理につれてきちゃってごめんね。来てくれてありがとう！」

嬉津枝の歓迎の言葉に続けて、えへへ、とばかりに申し訳なさそうに笑う琴樹。

……あ？

今度は別の意味で、硬直する一行。

えっと、どちらさまです？

「何突然キャラ変わってるのコトキくん」

「何のこと、颯火さん？」

無邪気そのものといった様子で首をかしげる琴樹。名前すら呼ぶことを拒否する琴樹がさん付け呼びということは…、これは猫かぶりモードの味だぜ！

しかし、かつて猫かぶりはやめる宣言をし（たのを建前にターム面子に歯に衣着せない悪口雑言覇気まくってい）たはずですが…、どうしたんでしょう？

「こら、琴樹い！　年上の人には敬語を使えっていってんでしょうが！」
「あ、はい、あの、颯火さん、すいませんっ！」
「あ？　え？　うん…いや…、」
嬉津枝の注意を受けて深々と頭を下げた琴樹に、颯火もやはり戸惑いを隠せない。後ろで様子をうかがっている面子も怪訝そうな顔つきです。
「……僕の母さん、なんか言葉遣いには妙に五月蝿くてさ…、母さんの前だけでいいから合わせてくれない？　もう一回、頭下げてもいい」
ちら、と嬉津枝のことを見て、琴樹は彼女に聞こえないように小さな声で告げる。凛以外の人には年上年下関係なくふてぶてしい琴樹が、彼曰く下衆であるところの颯火達に頭を下げてまで親の前での体裁を守るとは、思ったよりも親思いなんでしょうか？
「あ、ああ、わかった。…てか、お前もそういうこと気にするんだな」
「まあね、」
小さくため息をつきながらつぶやくように言うと、琴樹はふっと髪をふるって頭を上げ、ニッコリと猫かぶりスマイルを浮かべる。
「母さん、あとは僕が案内しておくから、問屋さんの方に行ってても平気だよ」
「悪いね、琴樹！　ついでに店番も頼んだよ！」
「あんまり寄り道しないで、今日はゆっくりで休ませてあげるといいよ」
「はい！」
「元気があってよろしい！」
嬉津枝は琴樹の頭を豪快にわしわしとなでると、楽揮のことをせかしながら荷台を引いて市街地へと向かっていった。嬉津枝の姿が見えなくなるのを確認すると、琴樹はほっと肩をなでおろして颯火達に振り返った。
「ふー、じゃあ行こうか。あ、リンも一緒に帰る？」
「うん！　でも、コト、やっぱり嬉津枝さんにはそのままなんだね…。私には普通に話してくれるようになったのに…」
「友達と親とで、言葉をわけてるだけ、普通のことだよ。リンが気にすることじゃないって」
「そうだけど…」
「…なんか大変そうだな、頼野」
「別に、お前らの相手するほどじゃないよ」
爆の言葉に皮肉で返して、琴樹はキンディネスの街へと歩を進める。流石地元民だけあって、入り組んだキンディネスの街を迷うことなくずんずん進んでいきます。そんな琴樹の横に並ぶようにして、葬屋が問いかける。
「なー、どこ行くんだ？」
「僕の家に決まってるじゃない。何処に泊まるつもりだったの？」

「え、あれ、琴樹って凛の家の近くに住んでるんじゃなかったっけ？」
「こっちは別荘、っていうか、母さん達の店。母さん、というか、僕の家系は都市部と農作地を行き来して、それぞれの場所で商品や材料を買い取ったり売ったりしてるんだ。商売はやっぱり街のほうが儲かるから、実家のある農作地には材料を買い付けに来るときくらいしかいなくて、結構家を留守にすることが多いわけ。向こうの家には実質僕しか住んでないよ」
「小さいころからコトのおうちは忙しくて、私のママとパパがコトの面倒も見てたの。十歳くらいになるまでほとんど一緒にすんでたから、半分兄弟みたいな感じなんだよ！」
仲むつまじい幼馴染アピールのつもりが琴樹のガラスハートをたこ殴りしてくるような凜の補足情報に、葬屋は思わず後ろにいた颯火と顔を見合わせた。
「親友で兄弟か…先が思いやられるな…、颯火」
「琴樹、俺たちはお前のこと、応援してるから！　めげるなよ！」
「う、うるさい…！」
『兄弟』という言葉が心に突き刺さって重傷を負っている琴樹は、反論する声も小さい。
同じ言葉も受け取り方によってこんなにも印象が違うとは、いやー言霊の世界は奥が深いですね！
「あ、もし兄弟だったら、私のほうが誕生日先だから、私がお姉ちゃんだねっ！」
「……うんそうだね……」
もうやめてあげてよッ！

И

「秋の収穫祭はキンディネスで一番大きなお祭りさ！　おいしいもんいっぱいくって、歌っておどってどんちゃん騒ぎだ！　せっかくのお祭り、そんな格好じゃなかなかなじんで楽しめないだろ！　郷に入っては郷に従え。うちでは服飾も扱ってるからね、適当に見繕って着ていきな！　もちろん、安くしとくよ！」
そんなこんなで、琴樹宅で一晩を過ごした一行は、嬉津枝さんの強い勧めに、キンディネスの民族衣装に着替えて街に繰り出すこととなったのでした。
「わー、さっちゃんかわいいっ！　すっごく似合ってるよー！」
「う、うえ、そ、そうかー？」
「うんうん！」
踊り子のようなひらひらのワンピースに着替えた皐月の手をとってはしゃぐ凛。
タームで男子に囲まれ、かつ、そのスレンダーすぎる体型から女扱いをされてきていない皐月は、凛にものすごい女子待遇を受けて珍しくたじたじです。性格も男前ですしね。
とはいえ、部屋割りで自然と同室になった凛と皐月は一晩語り明かして仲良くなったようで、凛

はすっかり『さっちゃん』呼びが定着しているようです。
「せっかくだから髪も結ってあげるよー！」
「あ、うん、かたじけないな…！」
女友達ができてうきうきの凛に、皐月はうなずくことしかできていない。
「あれ…皐月がすげー女子だ…」
「女子フィールドが見える…」
そんな仲むつまじい女子二人を、朝食をとりながら遠巻きに眺める颯火、葬屋をはじめとした男子軍。割と男女気にしない面子ではありますが、女子特有の空気には流石に入り込めない疎外感のようなものを感じるようです。
これが女子力って奴か…！
ちなみに、男子も全員民族衣装に着替え済みですよ。
「く…今、はじめて女になりたいと思った…」
本気で悔しそうに歯噛みしてつぶやく琴樹。
お前は凛ちゃんと仲良くできればなんでもいいのか。
凛に振り回されてかわいくなってる皐月を見守りながら表情を崩さない鶯を見習ってほしいですね。
「ま、でも、今日は一日中凛と一緒だしね！　お前らっていうお荷物兼お邪魔虫もいるけど、まあ目を瞑ってやってもいいかな！　みたいな！」

へへへ、と顔を緩めて大きなひとりごとをいう琴樹のところへ、凛がぱたぱたとかけてきた。
「あのさ、コト！　今日は私さっちゃんと回ってもいいかなー？」
「え？」
思わずスプーンを取り落とす琴樹。
凛はいつもの無邪気―かつ残酷な笑顔のまま続ける。
「私、こっちには女の子の友達いないから…、かわいい小物の出店とかあるんだけどね、一人で回るのはちょっと寂しくて…。でも今日はさっちゃんがいるから、色々回ってみたいの！　いい？」
「あ、お、え、うん、別ニ、いイけどォ？」
死刑宣告にも等しい申し出に、琴樹は得意の猫も上手くかぶれず、口元をひくつかせながらそう返すのが精一杯であった。
「ごめんね、ありがとうコト！　行こう、さっちゃん！」
「うおおお、転ぶ！　転ぶから！」
元気よく走り去っていった凛と皐月の後姿を琴樹はひきつった笑顔のまま見送り、ついでに鶯も呆然として瞬きを繰り返している。
静まり返る室内…。
何処と無く漂う葬式ムード。
みな一様に黙祷をささげる中、昨日からよれよれの霜一が琴樹の肩を優しくたたいた。
『……この清らか過ぎる街の中で俺は深刻なエネルギー不足だが、これだけは言わせてくれ…』
ふ、と霜一は小さく笑いかけ、
『琴樹ざまあああああああああああッ！』
ブギャーのポーズで大爆笑。ゲラゲラ笑う霜一に、琴樹は一瞬真顔になったあと、すう、と大きく息をすって、
「お兄ちゃんありがとう、僕のこと、心配してくれたんだね！　そんな風にからかってるけど、本当は僕に元気になってほしいんだよね！　ちゃんとわかってるよ！　僕うれしいよ、おにいちゃんっ☆」
『ぎゃああああああああああああああやめろおおおおッ！』
「ああああああああにいさああああああああんッ！」
さわやかな笑顔で超反撃。
蒼慈が蒼白な表情で叫ぶ中、すでに瀕死状態だった霜一はその場で霧散し、キンディネスのおいしい空気と同化してしまった。兄、終了のお知らせ。
「勝った…」
琴樹はガッツポーズをとると、そのまま机に倒れこんだ。そっと、すすり泣く声が聞こえる。
黙祷。
「鶯―？　おい、鶯―、生きてるかー？　鶯―？」
ちなみに、皐月を取られてしまった鶯も少なからずショックを受けているようで、爆の呼びかけに

瞳すら動かそうとしない。
凜ちゃんの発言がもつ殺傷力は、そろそろゼペットに目をつけられてもいいレベルだと思います。
「琴樹、元気出せよ…！　まだ明日があるじゃないか…！」
「明日までお預けってことじゃないかあっ！」
背中をたたく颯火の手を振り払って、琴樹はぷるぷる震えながらいう。
「うううー、祭りの時期の僕の楽しみはなんだとおもってるんだ…ッ！　リンと一緒に出店を回ることだよ…！　それなのにいい…ッ！　もう今日はどこにも行かないで引きこもってたい…ッ！」
「琴樹―、そろそろお友達さんたちをお祭りに連れてって、案内してあげなー！」
「はい、母さん！」
変わり身早あっ！
隣部屋から聞こえてくる嬉津枝の声に、さっきまで涙ぐんでいたとは思えないほど明るい調子で答えた琴樹は、暗い顔で振り返って重いため息。
「というわけで…、でかけるよ……」
「なんかごめんな…」
「べつに…お前らのためじゃないし……」
いや、本当、ご愁傷様です…。

и

ラングアゲとは大陸の真反対に位置するキンディネスは、他の国々とは森や海、砂漠、さらに険しい山脈に阻まれたまさしく偏狭の地である。人口は少なく、国境も定かではない。理想郷といわれるも、わざわざこのような偏狭を領土に組み込もうという国はおらず、良くも悪くも他国の干渉をほとんど受けていなかった。そのため、自給自足を余儀なくされたキンディネス人々は、徐々に中心部の海岸付近へと集まり、そこに築かれた大きな町で物々交換―商売を行うようになった。漁師は商人に魚を売り、商人は農村部へ魚を売りにでかける。農家は商人に野菜や米を売り、商人は沿岸都市部でそれらを売る、という、今の時代ではまどろっこしいとも思えるようなシステムが、人々の思いやりや絆によって、今も生き続けている。
そんなキンディネスの商業の中心地である都市部で行われる収穫祭の賑わいは相当なもので、町中が飾り付けられ、踊り子があちらこちらで花を振りまきながら踊っている。楽しげな音楽がどこからともなく聞こえてきて、自然と心が浮き立ってくるようだ。
「ドーンッ、ベガッ、ズンッ、ガキラアアアッ！」
広場の真ん中にある特設会場で、擬音を叫びながら暴れまわる爆は、完全にノックダウンさせた相手の腕にまかれた赤いリボンを解いて、高く掲げた。
『またしても爆くんの勝利い―――ッ！　なんと飛び入り参加で七人抜きという快挙ぉーーーッ！

この勢いは誰にも止められないぞーッ！』

甲高い女声のアナウンスが流れると、会場を囲む大勢の観客達が歓声を上げた。

「流石爆、タームのエースなだけあるなー」

「あーあー、前があの時爆倒してれば今頃俺があそこにいたのになー」

「おい、何で俺のことを踏み台にすること前提なんだ」

「手前みたいな見掛け倒しなだけのにぶちんに俺が負けるわけないだろ」

「はァ？　お前みたいな細腕に何ができるっていうんだよ」

「腕相撲でいつも勝ってるからって人を非力呼ばわりするのはよくないだろ！」

「徒競走でいつも勝ってるからって人を愚鈍呼ばわりするのもどうかと思う！」

「そんなことよりホットドック食おうぜ、さめる」

「その意見には同意」

「……、」

盛り上がる観客達にまぎれ、ホットドックを食べながら会場の爆を眺める颯火と葬屋、それから無言でパイを食べる鶯。葬屋の手には射的用のモデルガンや、大きなテディベア、颯火はキンディネス産のお菓子や果物が詰め込まれた紙袋を持っているし、相当祭りを楽しんでいるようです。

この祭りではさまざまなイベントが催されていて、今爆が参加しているのは、武器なし、言霊あり、の腕っ節と舌先だけを使って十人連続で倒したら賞金がもらえるというちょっとした大会です。ルールは、選手は、体のどこかに赤か青のリボンを巻き、それを相手に取られたら負け、というもの。なので、力が強くても、リボンを掠め取られてしまったりも少なくないのですが…

「ダダダダッ、ギュンッ！　ドンッ！　ドスァッ！　ギャスンッ！」

爆は、擬音の言霊で自身の戦闘能力を上げて突っ込むという、力でごり押すいつものスタイルで、すでに七人をノックダウンさせていました。

「ズガァァンッ！」

「うぎぁッ！」

爆のキレのある蹴りが相手のあごにクリティカルヒット。大の字になって伸びきった相手からリボンを取り上げ、またしても爆の勝利です。ターム仕込みの言霊はだてじゃありません。

ちなみに、颯火と葬屋も出場したものの、彼らは基本的に銃を使うノーマルな言弾遣いである上に、大会は一人ずつの参加。ほぼ腕っ節だけのケンカで、葬屋はどうにか一人倒すも乗り込んできた爆にボコられて敗退。その後、爆に挑んだ颯火も同じく返り討ちにあったのでした。

「しっかしよ、言霊使ってくるやつも少ないっていうのに…爆チートすぎるだろ…」

「賞金ほしかったなー。くそー、さっきの射的大会では優勝したのにさー、景品がこのどデカい熊だもんな。まあ、帰って由卯か水鳥にでもあげれば喜ぶだろうから、まあいいけど」

「安心しな！　お金の方は明日の女装コンテストで俺が賞金がっぽりもらってきてあげるからさ！」

「お前最近また女装癖もどってきてね…？　ま、そん時はうまいもんおごれよ」

「任せろっ！」
「颯火さーん！　葬屋さーん！」
そんな風に二人がだらだらとしゃべっていると、人ごみを掻き分けて蒼慈がやってきた。
「こんなところに居たんですかー！　探しましたよお…！」
「悪い悪い、射的に夢中になってる間に手前らどっかいっちゃったから勝手に楽しんでた」
「爆さん達とは合流できてたみたいですね…。よかったです！」
「あれ、コトキチはー？」
「ああ、琴樹さんなら…」
颯火の問いに、蒼慈が振り返って指差した先には、ケバブを食べながら頭を抱える琴樹がこちらに向かってくるところだった。
「くそおおお！　結局世の中金かよッ！　ちくしょおおッ！」
「どうした琴樹、突然リアルな問題持ち出して」
「あー、そこのショタが生意気に案内しろだのはぐれるだの五月蝿いから、適当にその辺の出店回ってたんだけど、その途中でリンのために作られたんじゃないかっていうような髪飾りを見つけたんだ。で、買ってプレゼントしようと思ったら、値段の桁が…ひとつちがう…ッ！　くそおっ！」
琴樹はいらだちながら電灯の柱にもたれかかり、残っていたケバブを一気に口に放り込んだ。
「で？　あの自爆野郎は何してるわけ？」
「十人抜きに挑戦中。そろそろ賞金もらって降りてくるころじゃないか？」
葬屋がいう間にも、爆はまた相手を殴りとばし、勝利を収めていた。これで九連勝。あと一人倒すくらい造作ないでしょう。
「賞金か…、ねえ、ちょっと大会の詳細見せて」
琴樹は颯火がもっていた大会ルールの書かれたチラシを取りあげてしげしげと眺めると、決心したように強くうなずいた。
「うん、僕この大会でるよ」
「っえええええ！？　マジでッ？！　無理だろ！」
思わず全力で否定してしまう颯火。さきほどもいったとおり、この大会は半分以上腕っ節勝負です。体力も腕力も蒼慈に負けるほどの琴樹では勝ち目がまったくありません。
しかし、琴樹は自棄になったわけでもなく、いたって真剣な面持ちです。
「僕だってタームにぶちこまれて三ヶ月、何もしてこなかったわけじゃないんだからね。ゼペットに教えこまれた『毒吐』があるんだ。悪言は言霊の枠に入るから、問題ないはずだし…」
「手前…そうまでして賞金がほしいのか…」
「欲しいのはお金じゃない、その先にあるリンの笑顔だッ！」
超真剣に言い放つ琴樹に、颯火は驚いてひゅーと口笛を吹いた。こっ恥ずかしいことをここまではっきりいえるとは、凜への病的な愛も捨てたモンじゃないですね！

「一度十人抜きを達成した人を倒した上で、さらに十人抜きするともっと賞金がもらえるのか…。そうすれば、リンへのプレゼントだけじゃなく、おいしいもの買って、母さん達にごちそう作ってあげることもできる…！」
「親孝行だなー、明日は誕生日だっていうのに」
「生まれた僕が祝われるなら、がんばって産んでくれた母さんもねぎらわれるべきに決まってるでしょ。お前らももうちょっと僕を見習って親孝行しなよ」
「うぐ…」
もっともな意見に言葉を詰まらせる颯火を尻目に、琴樹は爆の十人抜き達成で沸く会場へと向かっていく。
『爆くん！　見事十人抜き達成でーーーーーっす！　おめでとうーーーーーーーーっ！　さぁーて並みいる相手をばったばったとなぎ倒す無双のばか力をもつ爆くんに、賞金アップのチャンスをかけて挑戦する猛者はいるかーーーーッ！？』
「頭爆発ぼさ髪男！　僕が相手だ！」
『おおっとおーーーーっ！？　多くのマッチョを倒してきた爆君への挑戦者はーーっ！　なんとこの小柄の少年だーーっ！』
「チビっていうなこの騒音アナウンスッ！」
スピーカーに悪態をついてから、琴樹は爆を見据える。
「な、頼野！？　正気か…？！　俺は不器用だから、手加減はできないぞ？」
「このゲームは力がすべてじゃないって僕が証明してやる！」
「なるほど、覚悟の上のようだな。いいだろう、全力で相手してやるぞ、頼野！」
琴樹が審判から手渡された青いリボンを首に巻くのを見て、爆も頭に巻きつけたリボンを結びなおした。交錯する視線、はじける火花。燃え上がる闘志！
さてさて、熱い展開になってきましたよ！
「俺、爆に焼きりんご一個かけるけど、葬屋は？」
「じゃ、琴樹にクレープ一個かける」
おいこらそこ、賭けてんじゃねえ。
『さあ！　果たして勝負の行方はーーっ！？　それではーーっ！　レディーーッ！　ファイッ！』
カーン
ゴングが鳴ると同時に動いたのは爆。大きく床を蹴って跳ぶように距離をつめ、腕を振り上げる。
「り、《リガアチタョゲカ》《レナトテタガワ》！」
その気迫に圧倒されながらも、琴樹はそう叫んでダン、と強く足を踏み鳴らす。すると、影が黒く壁のように立ち上がり、爆のこぶしは霧のような影を突き抜けた。殴った感触は無く、見ると、琴樹は悪態をつきながら会場の端へと逃げていた。
「これだから脳筋は嫌なんだよッ！　何が不器用だよ容赦の一つもないじゃないか！　二つ下のいた

いけな少年を真正面から殴ろうとするなんて物騒乱暴野蛮極まりないクソだ！」
「頼野！　逃げてないで真っ向から勝負しろおお！」
「嫌だねッ！　誰も真剣勝負するだなんて言ってないだろ何勝手に勘違いしてるんだよどっかのまろまゆかってんだキャラかぶりもはなはだしいんだよッ！　僕はお前らみたいなマゾヒストと違って自分の体は大事にするタイプなんだッ！」
「勝負が始まってからぐちぐち言うとは格好悪いぞ、頼野！　ビャガンッ！」
逃げる琴樹に向かって擬音を叫び大きくこぶしを振るうと、今度は思い切り琴樹の頬をえぐった。
「〜〜〜痛ぁっ！」
うめく琴樹は、しかし、殴られて吹き飛ぶことはなく、なぜか爆の背後に瞬間移動したかのように現れ、また逃げ始める。眉をひそめながらも爆は追撃をやめず、逃げる琴樹にこぶしを叩き込む。しかしそのたびに、琴樹は瞬間移動し、ひたすらに逃げ続ける。
「琴樹なにしてんだー！？」
「おいおい、あれだけ自信満々に出て行ったから何かあるかと思ったらやられっぱなしじゃん」
「外野黙ってろ耳障りなんだよ鼓膜が穢れるだろ！？　そんな頭の悪い発言しかできない声帯は腐り落ちろクずあああっ！？」
「いいかげんにしろ、頼野おおおッ！」
葬屋と颯火のやじに気を取られているうちに、琴樹の背中に爆の容赦ない蹴りが叩き込まれる。うめき声をあげてそのまま倒れこむ琴樹を、爆は片手で押さえつけ、首もとのリボンを取り上げようとした。しかし、
「うっ、がーーぁあーーっ！」
リボンが絡まって、琴樹の細い首が強く締め上げられた。ハッとしてあわてて手を離すも、きつくしまったリボンはそのまま琴樹の首に食い込みつづける。
「あ、そんな、ちょっと、嘘だろ…ッ！？」
爆の顔から一気に血の気が引き、あわててリボンに手をかけるが何故だか体が上手く動かない。手が震えて結びを解けない。そうこうしているうちにも、琴樹はうめき声を上げ、苦しみ続けるている。
「ヒ…ぎぁ…うっ……ッ！」
「あ、え、ど、どうしよう、どうしよう、解けない、ほ、解けないどうしようッ！」
焦りが募る。手の震えが止まらない。歯の根すら合わなくなってきた。
うっ血し、青ざめる琴樹前に、爆は何もできない。
どうしようどうしようどうしよう。
手加減ができなかったでは済まされない。このままでは琴樹が死んでしまう。今も苦しんでいる琴樹を助けられないで居るどうしようどうしようどうしよう！
「よ、頼野！　しっかりしろッ！」
呼びかけるだけで、手は動かない、頭が真っ白になる、人殺しか、俺は人殺しになってしまったの

か、うそだろ、そんな、うそだ、どうしよう、どうしようどうしようどうしよう――――

「う、うわあああああっ」

パンッ！

と、目の前で手をたたかれ、爆ははっと我に返り顔をあげた。すると、そこには傷一つ負っていない琴樹の姿があった。手には爆が頭に巻いていたリボンをひらひらさせている。

「はいどうもー、お疲れ様」

「……は？　あ、あれ？　頼野？　あれ？」

まさに目が点の爆。改めて視線を落としてみるも、横たわっていた琴樹はもちろんいない。さらに不思議とさっきまでの焦燥感や罪悪感がすべてきれいさっぱり消え去っている。

どういうことなの？

「爆どうしたんだ？　うずくまったと思ったらさっきから一人で叫んでさー！」

「は？」

「よく分からないこと言ってる間に琴樹にリボン取られてたぞ？」

「へ？」

颯火と葬屋の言葉もまるで理解できない様子で頭の上に疑問符を増やし続ける爆に、琴樹はしたり

顔で、うばったリボンを高く掲げた。
「僕の勝ちだ！」
『ななななんと、勝者はちびっこ、改め琴樹くんだーーーーーッ！　いったい何が起こったのでしょうーーッ！？　不思議な戦い方で十人抜きを達成した爆君を倒してしまったーーーっ！』
戸惑い気味に叫ぶ甲高いアナウンスを発端に、周囲から一気に歓声が上がる。琴樹は奪い取ったリボンを握り締めて、にやりと悪い顔で笑った。
「コレで賞金は僕のものだ…！」

「まさかの琴樹が七人抜き…」
「おそるべし『毒吐』…！」
葬屋と颯火が呆然と見守る会場では、琴樹が影を使って立ち回っている。どの戦いも、突然相手が虚空に向かって叫んだり、見えない何かにおびえている間に琴樹がリボンを奪い取る形で勝負がついていました。
『実は、さっきお前が殴っていた僕は、僕が作った悪言による残像、幻覚なんだ』
今後の戦い―賞金に関わるから秘密厳守でよろしく、と前置きをしてから、琴樹は毒吐を使った戦法について颯火達に話してくれた。
『僕が瞬間移動したように見えたのはそういうこと。つまり、爆は僕を殴るたびに悪言の瘴気をあびて、体の中に悪言の残滓がためこんでいく。最初の一発も、悪言の影で作った壁だから同じ。とにかく、僕の影の攻撃を受けたり、逆に僕の影に攻撃をすると、悪言の《毒》を浴びる。それはじわじわとたまっていって、一定量―個人差があるらしいけど―たまると幻覚が見えるようになるんだ。ちょうど、悪言に食われたときと同じようにね』
悪言は、それ自体が凶暴かつ危険である以前に、それが溜め込む負の言霊が人の生気を穢し、食らってしまうことに化け物たる所以があります。悪言に食われると、人はひどい恐怖や焦燥、不安、疑心に襲われ、幻覚や幻聴作用を起こす。そうして、体が蝕まれる以前に心が殺されるのだと。
実際、前作の『信じろ！』で颯火が悪言にのまれた時も、同様の現象が起きていましたね。
『爆には、僕を殴った、傷つけたという加害経験がある。そこに悪言の《毒》が回って、僕を殺してしまったという幻覚を見たんだと思うよ。《毒》は僕の逆言葉でのコントロール下にあるから、それで体の自由を奪ってから、僕は優雅にリボンをゲットしたってとこかな』
琴樹はもともと悪態をつくことで簡単に悪言を作り出すことができたので、今までも逆言を使ってただ操り戦うことができました。しかし、より高度な精神コントロールをゼペットとともに特訓したおかげで、ある程度逆言無しで悪言の形態変化等ができるようになり、その結果、このような《毒吐》という幻覚を用いた性質の悪い戦い方をすることが可能となったのです！
なんというか、ゼペットさんは強い人材を育てて世間のために尽くしたいのか、たちが悪くて手に

負えないガキを増やして楽しんでるのかちょっとわからないですね。
　そんなわけで、対爆戦で味を占めた琴樹は、その後も同じように相手に悪言の《毒》を浴びせかける戦法で挑みました。幻覚症状が出始めたら後は琴樹の独壇場で、普通の悪言で攻撃をしかけたり、体の自由を奪ってたりして相手のリボンを奪って終了です。
　キンディネスには言霊に詳しい人は多くありませんから、琴樹が何をやっているかネタばらしでもしない限り分かりません。流石に悪言の出現には観客もどよめきましたが、今では『悪言を操る謎の少年！』みたいに盛り上がりの種になっています。
『おおおおおーーーッ！　呪術のような不思議な戦法で、琴樹くんついに九人抜き達成――っ！　少年を止められるものはいるのかぁあーーーっ！　次の挑戦者はーーーっ！』
「あ、あの、僕です！」
「はぁあああああっ！？」
　会場にぴょん、と飛び乗り参加宣言をしたのはまさかの蒼慈。それまで『賞金賞金！』と瞳にドルマークを浮かべていた琴樹の機嫌は一気にどんぞこです。
「お前、何考えてんだよ！　ブラコンショタの分際で、僕のプレゼント作戦を邪魔しようなんて、調子に乗ってんじゃないよッ！　ひっこめＫＹ！」
「いや、その…、『このまま琴樹さんがストレート勝ちするのはなんか癪だ！』って颯火さんが言うんで…」
「はぁッ！？　余計なことすんじゃねーよこのクソビッチがぁあああッ！」
「バトルにはスリルと盛り上がりが必要なんだよっていうか誰が雌犬だこらァッ！　蒼慈、やっておしまい！」
　観客席の颯火達を目で殺す勢いでにらみつける琴樹に、身を乗り出して叫ぶ颯火。
「あのっ、勝ったらちゃんと霜一兄さんが元気になるまで罵倒してくれるんですよねっ！」
「男に二言はない！」
「分かりました！　僕、がんばりますっ！」
　颯火の言葉に、ぱぁあ、と心底うれしそうに笑う蒼慈。あの親琴樹派の蒼慈がわざわざ賞金妨害に乗り出す裏にはやっぱり愛しのおにいちゃんが関わっていたようですね！　納得のブラコン魂！
「あー、でも一応戦うのは僕だけですよ。兄さんは今負の言霊が足りなくて具現化できませんしね。ただ、琴樹さんが僕に《毒》を浴びせたら、それを種にして兄さんは起きちゃいますよーえへへ」
「ぐ…っ！」
　つまり、蒼慈と戦うにあたっては、今まで使っていた《毒》による幻覚誘発という戦法は使えないということになる。相手が蒼慈とはいえ、身体能力は琴樹より格段に高い。特殊技なしとなると、明らかに琴樹が不利です。
　あせり表情を険しくする琴樹とは対照的に、蒼慈は準備運動をしながら楽しそうに笑っています。
「にいさ～ん！　にいさ～ん！　もうすぐ会えるねっ♪　ふんふん～♪」

「こんの神聖ブラザーコンプレックスめ…」
なんだかブラコンを超えて怖いです。
『今度の挑戦者はなんと子供だあーーーーっ！　この勝負の行方、どうなるのかーーーっ！　また琴樹君の圧勝で終るのかーーーっ！　それではーーっ！　レディーーッ！　ファイッ！』
カーンと、ゴングが鳴り響いても、二人とも向き合ったまま動かない。蒼慈は軽く床を蹴りながら、琴樹の出方をうかがっているようです。余裕なのもそのはず、琴樹が《毒》による攻撃をしかけてこようと、肉弾戦を仕掛けてこようと、蒼慈が有利なことには代わりがないのです。
というか実際、蒼慈としては琴樹の《毒》でさっさと霜一兄さんを回復させたかったりするので、琴樹にはやく攻撃してもらいたいんですね。
はた迷惑なブラコンである。
「こーとーきーさーん、もう勝負はじまってますよ？」
「くっそ…ッ、なめやがって…！　僕は、こんなところで、こんなやつに、負けたりはしないッッ！」
蒼慈の挑発にキレた琴樹は、思い切り床を蹴って蒼慈に突撃する。どうやら真正面から肉弾戦で勝負するつもりのようーー
「《ヲサバツニシアガワヨゲカ》ッッ！」
「えっ！？」
と、蒼慈の間合いに入った途端に、琴樹は影を足にまとい、大きく跳躍。呆然とする蒼慈を飛び越えて、そのまま背後を取り、
「しまっ！？」
影の力で加速させた蹴りを蒼慈に叩き込んだ。強化に使った影は直前で消しているので、蒼慈に《毒》は回りません。
間髪いれずに琴樹はよろけた蒼慈の隙をついて首に巻いたリボンを奪おうする。が、その腕は後ろ手に蒼慈につかまれ、投げ飛ばされてしまった。
「僕を甘く見ないでくださいよ！」
受身も取れずに地面に体を打ちつけた琴樹に、蒼慈はかかと落しを食らわせる。当然よけられるはずも無く、琴樹は痛みにうめくが、追撃は腕に影をまとい間一髪で避ける。
「琴樹さん、悪言を身にまとうのは、自身にも《毒》が回って、悪言の調整が難しくなっちゃいますよ！　ゼペットさん言ってたじゃないですか！　やめてください！　そんなことしないで、素直に《毒》を使えばいいんですよっ！」
「そんなの『負けてください』って行ってるようなモンだろ何が危ないですよだ偽善者ぶりやがって！　僕はお前なんかには負けないッ！」
影を使いながら琴樹は蒼慈の攻撃を避け続ける。しかし、影を使うたびに琴樹の顔色が悪くなっていくのは確かです。
「こときさーー」

「うるさい！」
心配から動きが鈍くなって蒼慈の手刀を受け止めると、後ろに回りこみ、蒼慈の小さな影を力強く踏みつけた。
「《ロレワヌシアニゲカ》！」
琴樹が叫ぶと、影が立ち上がり蒼慈の手足に絡みついて動きを封じた。
しかし、これは悪言が蒼慈に触れ、《毒》が伝わっている状態。長い間維持すれば霜一が覚醒してしまいます。しかし逆に、霜一が出てくる前にリボンを奪ってしまえば琴樹の勝ちです。
「もらっ、たあ、ああッ？！」
琴樹は再度蒼慈のリボンに手を伸ばすが、突然腕に激痛が走った。小刻みに震えだした腕に、歯を食いしばる。どうやら《毒》が体に回り始めてしまったようです。
本来なら《毒》も琴樹自身の逆言葉や精神コントロールで制御できます。しかし、コレまでの戦いの間、悪言を作り出す都合上、琴樹は常に相手に対してキレていなければなりませんでした。怒りによる精神的な疲労は少なくありません。蓄積した疲れと、突然現れた蒼慈という障壁に、琴樹はひどくあせり、また混乱して悪言の制御ができません。
一見最強にも見える《毒吐》の欠点はこの、精神疲労によるコントロールの喪失なのです。
あせりは不安を生み、悪言を産み、徐々に琴樹の影がざわつき始めた。
「が…っ、ああっ……！」
「琴樹さんッ！？　どうしたんですか、琴樹さんッ！」
『ヒギ、ミ、ギイアァァアアアァッ！』
ついに、うずくまる琴樹の影から悪言が立ち上がり耳障りな叫び声をあげた。ざわついていた客席からも悲鳴が上がり、傍観していたなにごとかと颯火達も立ち上がり、臨戦態勢に入る。
「おい、葬屋、あれやばいんじゃね？　早く止めたほうがッ！」
「待て、ヘタに暴れると観客が混乱してけが人が出る。それに俺達は銃置いてきてるし、爆の《爆弾発現》は逆に被害が広がる可能性がある。一発でしとめられなかったら、逆に凶暴化するかもしれない…！」
「くそ…ッ！　何やってんだよ琴樹…ッ！」
一方、影にとらわれ身動きの取れない蒼慈は、聞こえる雄たけびと自分にかかる大きな影におびえて何もできません。呼吸が乱れ、体も小刻みに震えています。
「やだ、こわい、こわいよ、うそ、体うごかないし、どうしよう…ッ！　やだ、悪言にくわれ、るの、やだ、こわい、こわいよ…っ！」
蒼慈の兄―霜一は、悪言に食われて死んでおり、蒼慈はその一部始終を見ていました。そのおそろしい記憶が、フラッシュバックしたのか、蒼慈の顔はみるみる青ざめていく。
頭の中を支配する恐怖、兄の死の光景、目に見えない背後の気配…
「あ、あ、に、にいさ…、兄さあああああああんッッ！！」

『はいはい、泣き止むな、蒼慈』

途端、蒼慈に巻きついていた影が凝縮し、霜一の姿を成した。蒼慈を後ろから抱きとめる形で具現化した霜一は涙ぐむ蒼慈に、言葉度は裏腹、どこか慰めるように軽く頬ずりした。

『やっぱお前の絶望的で悲劇的な嘆きが一番癒されるわー、流石俺の弟』

「うう、うええ…にいさん…っ！」

『あとは任せろ』

すっと、そのまま溶け込むように蒼慈に憑依した霜一は、うーんと伸びをしてから振り返り、ぶつぶついいながらうずくまる琴樹と背後で揺れる悪言を交互に見て、あきれたようにため息をついた。

『はー、なにヘバってんだよ少年。手前のクソだろ、自分で処理しやがれガキ』

「…分、かってる、分かってるけど、でも、でもどうしたらいいか、わからな、わからなくてッ！　あああもうッ！　なんなんだよおおッ！」

琴樹の苛立ちにあわせて、それまで揺らめいていただけの悪言が牙をむいた。そして、きしむような叫び声をあげながら、鋭いつめを琴樹に向かって振り下ろす。

『させねーよッ！　それは俺の嗜虐対象（対戦相手）だ！』

すかさず飛び出した霜一が、その爪を蹴り飛ばし、さらに手刀で腕ごと切り落とした。しかし、その黒い腕はすぐにヘドロとなって悪言の中に吸収されていってしまう。

世の中エコが叫ばれていますが、悪言までリサイクルするとはもったいない精神もここにきわまる感じですね。実に厄介です。

『おい毒舌少年、一分だけ時間作ってやっから、その間にどうにかしろ！　そして、俺に助けられていることにプライドを傷つけられて怒りと悔しさにまかせて思い切り罵倒しろ！　わかったなッ！』

「どうしよう…どうしたら…ッ！」

『こいつ話聞いてなーいッ！』

吹っ切れたような笑顔で悪言を力任せにけたぐる霜一。しかし、悪言はやはりすぐに再生してしまう。襲い掛かる悪言を切り刻みながら時間を稼ぐも、琴樹は自虐と焦燥から抜け出せずにうなるばかりです。

『あーーッ！　やってらんねーッ！』

霜一は柵を踏み台にして、悪言を飛び越える。そして、着地の勢いもそのままに琴樹のこめかみに向かって思い切りまわし蹴りを叩き込んだ。

「――ッはァ！？」

『いつまでも腑抜けてんじゃねーよッ！』

倒れこんだ琴樹の腹を思い切り踏みつけ、琴樹のうめき声に恍惚としながら、なおも腹を圧迫し続ける。

『俺はさァ、こんななんの感情もねえスライムの相手してるより、こうやって人間を蹴って殴って嬲っていたぶって、醜くうめき苦しんでる姿を見る方が大っ好きなんだよなァ！　暇をもてあましてうじうじしてるくらいだったら、俺のためにかわいく嘆いてみたらどうだ、エエ？　爪の四、五枚なら剥いでやってもいいんだぜ？　アハハハハッ！』

首に巻かれたリボンで琴樹の頭を引っ張りあげて、霜一は笑う。

『悪言の悪夢から逃げられねぇってんなら、嫌でも目覚めたくなるくらいの悪夢を俺が見せてやるよ』

「――――――ッっざけんなあああああああああッ！」

突然琴樹が叫んだかと思うと、思い切り霜一に頭突き。目を白黒させる霜一を突き飛ばして、体勢を整えて高らかに詠唱。

「《ケサリキヨコア》ッ！　《レナトギルツガワ》ッッ！」

すると、無限再生を繰り返していた悪言が紡錘状に分裂し、弾丸のように霜一に向かって飛び出す。しかし、すべての砲撃を霜一はふらつきながらも避けてしまい、それに琴樹は表情をさらに険しくして、憎憎しげに叫ぶ。

「僕がおとなしいと思って調子にのってんじゃねぇぞ下衆ッ！　てめえの悪趣味に付き合うくらいなら首かっきって死んだほうがマシだっつーのッ！　死に底ないの悪霊がッ、自分のお墓に帰って静かにおねんねしてなッ！　念仏くらいは唱えてやるよ！」

『はーー、やーっと元に戻ったかあーーー』

「……は？」

半ば目を血走らせながら肩で息をする琴樹に、霜一は服の誇りを払いながら言う。

『ああやって挑発すりゃあ、確実に“俺に対して”怒るだろ？　そしたら、不安だのあせりだのっていうあいまいな悪言はぜーんぶ俺への憎しみに変わるから、逆に落ち着けるって算段よ。そして見事大成功ーッ！　お兄ちゃんあたまいいーッ！』

「なん…っ！　つ、都合のいいこといってんじゃねーよッ！」

慌てたように難癖をつける琴樹ですが、霜一の態度の変わり具合に戸惑いを隠せません。

言っていたことは半分以上…というか全部本気だったんでしょうし、面倒くさい悪言をさっさと片付けたかったというのも主な理由ではあったんでしょうが、ともあれ、琴樹の正気を取り戻そうとして動いてくれたのは確かです。

しかし、結果的に助けられる形となってしまった琴樹は敗北感やら情けなさやらなんとも複雑な心境。なんと言っても相手は全世界忌むべき存在ランキング堂々の第一位であるところの霜一ですしね。とはいえ、売られた恩は生産しておかないと気持ちが悪いのも確かです。

というわけで、

デュエル！

「……おい…！」

『あ？』

琴樹は鴛ばりに口をもごもごさせたあと、ぼそ、とつぶやくように言った。
「…その……ありがと…」
『――――――、ひ』
俺のターン、ドロー！
琴樹の感謝の言葉で、霜一にダイレクトアタック！
『ぎゃあああああああああきめえええええかゆうううううざけんなてめえええええええ人が助けてやったのにお礼とかふざけてんのかあああああああ！　あッ？！　ていうか俺人助けとかなにいってんあああああああ自滅あああああああああああああッ！』
霜一に１０００００００のダメージ！
ターン、エンドだ…
バタン、
まさしく断末魔という悲痛な叫びをあげ、頭をかきむしりながら、霜一、その場に昏倒。
吹き抜ける一陣の風…、
ぶっ倒れた霜一を白い目で見下ろす琴樹。
ほんの少しだけ開きかけた琴樹の心の扉が音を立てて閉まった。
そして、悟った。この下衆野郎と和解するとか無理ゲーであるということに。
琴樹は達観者の顔になって、霜一のリボンをうばいとって無言のまま掲げた。
『なんと――っ！　さまざまなトラブルをのりこえて――ッ！　今、琴樹くんの勝利がきまりました――っ！　おめでとうございます――っ！　そしてこちら、賞金になりま――すッ！』
「……、」
なんだろうこの…腑に落ちない感じ……

「おつかれ琴樹―っ！　いやーひやひやしたけど、よくがんばったな！」
「何ががんばったな、だよ。お前が気まぐれ起こして蒼慈を送り込んだりしなければこんなことにはならなかったんだよッ！」
「ま、観客には楽しめてもらえたみたいだし、結果オーライじゃね？」
「なんかおごって」
「はい、なんなりと！」
不機嫌そうに言う琴樹に、颯火は二つ返事で即答。霜一の犠牲によってどうにか悪言による被害を最小限に抑えられたからよかったものの、あわや大惨事が起こりかねない事態を引き起こした割と元凶ですし、当然の対応ですね。
ちなみに、ぶっ倒れていた蒼慈は意識を取り戻しましたが、足元がおぼつかないのをみかねた爆におんぶで会場からつれだされそのままです。若干十四歳になってまでおんぶだっこされている状況に、

流石の蒼慈も羞恥心に耐えられず、爆のボサ髪で顔を隠すしかありません。
「……、」
あ、もちろん特になんのアクションも起こしていませんが、鶯はずっと主人公達の横にいます。
「まあ、賞金は手に入ったことだし、髪飾り、買いに行くんだろ？」
「言われなくても行くよ、うるさいなー、あ、颯火荷物もちね」
年下のサブキャラにパシられる主人公（笑）って…
「あと、市場にもよるからね。食材を買い集めないと。探すの面倒くさいんだからはぐれなーーー」
言いながら、視線を市場のほうへ向け、琴樹は立ち止まった。視線の先には、凛と皐月、そして、険しい表情をした嬉津枝が立っていた。
やばい。
明らかに今来たばかりという様子ではなさそうです。
嬉津枝は後ずさる琴樹を強くにらみつけたままつかつかと歩み寄り、
「あの、母さん、これは――」
「こんの馬鹿息子！」
バシン、と思い切り琴樹のほおをはたいた。琴樹は目を白黒させ、握っていた賞金の封筒を取り落としてしまった。一行もハッとして口をつぐむ。
「あんた、何やってんだッ！　あんなバケモン操って、調子に乗ってるからさっきみたいなことになるのさ！　悪言がどんだけ危険なものか、お前も良く分かってるはずだろ！　下手したら、ここにいた人ら全員ただじゃすまなかったんだぞ！　その責任がお前みたいなガキに取れるのかい？！」
「あ…でも…、大事にはならなかったし…」
「そんなの、運が良かっただけだ！　なんだいあれは、才能があるっていうからタームに送り出したのに、また前みたいなひどい言葉遣いになってるじゃないか！　やっぱりお前みたいな軟弱者をタームに送り出すんじゃなかったよ…！」
「でも、ぼ、僕これでも強くなって…それで…賞金で母さん達にも…喜んでもらおうとおもっ…」
「そんなことで手に入れた金なんかで親孝行なんて、うれしくもなんともないよ！　あんなきったない言葉…、治せって言っただろう！　そうやって人を傷つけるような言葉ばっかり使って、そんなにたのしいのかい！？　お前は人の気持ちも考えられないのかい！？」
「そういうつもりじゃ…」
「じゃあどういうつもりだってんだい！」
何度も食い下がる琴樹に、嬉津枝はより一層険しい表情で怒鳴りつける。その気迫に押されて、琴樹は口を動かすが何も言えず、うつむいてしまった。
「私はね、あんたをそんな風に育てた覚えはないよ！　どうしてそうなっちまったんだい！　そうやってひどいことばっかり言って、それでいいとでも思っているのかい！？　なんで治そうとしないんだ！　なんでわからないんだいッ！」

「わかってないのはそっちだろッ！」
強く地面を踏みつけて、うつむいたまま琴樹は叫んだ。強く握りしめたこぶしが震えていた。
「確かに僕は失敗したけどさ！　でもさ！　いいじゃん、そんなのさ！　どうにかなったじゃんッ！　なんだよ！　なんでそんな風にいうんだよ！　ぼくは、僕は母さん達を喜ばせようとさ、がんばったのに…ッ！　言葉遣いがなんだよ！　仕方ないだろ、こういう言葉しかでてこないんだよッ！　僕だって分かってるよ！　誰かを傷つけたいわけじゃないよッ！　仕方、ないんだよ…ッ！」
搾り出すようにいう琴樹は、あまりにも痛々しく、軽々しく『落ち着けよ』とはいえないような、必死の形相だった。
「どうせさ、どうせ母さんはいい子な僕がいいんでしょ！？　いい子じゃなきゃ僕だって認めてくれないんでしょ！？　知ってるよ、そんなの知ってるよッ！　くそっ、なんだよ、不出来な息子で悪かったなッ！　僕だってなりたくてこんな風になったわけじゃないよ！　仕方ないじゃん！　どうしようもないじゃん！　このままでいさせてよッ！　なのにさ、なのになんで…ッ！」
肩を震わせ、一度も顔を上げようとしないまま、琴樹は嬉津枝に背を向けた。
「……少し一人にさせて」
「あ、待って、待ってコト！」
「離せッ！」
凛の手を乱暴に振り払った琴樹は、なぜか凛よりも哀しそうな顔をしていて、そのまま唇をかみ締

め人ごみのへと走り去っていってしまった。
「……いやー、悪いね、へんなとこ見せちゃって！　まあ、多分あいつも腹減ったら帰ってくるさ」
嬉津枝はそうぎこちなく笑って、じゃあ、と家のほうへ帰っていってしまった。
二人が居なくなった後も、誰も口を開こうとしない。気まずさばかりが残って、何を話していいのか分からない。いったい、どうすべきだったのかさえ、よくわからない。
颯火はふと、琴樹が去っていった方へ目を向けた。もう日がくれかかって、空も赤い。あんなにも哀しそうな琴樹をみたのははじめてだった。今彼は、どんな思いで居るのか…、
そうしてみな黙りこくっていると、リンが決心したように顔をあげた。
「……みんなに、話しておきたいことがあるの…」

И

「あのね、コトがああいう言葉遣いするの、なんでかわかる？」
言葉数も少ないままにリンにつれられて家に戻ってきた颯火達は、嬉津枝の居ない大部屋に集まっていた。長い机の真ん中に座るリンの言葉に、みな静かに耳を傾ける。
「それは、琴樹が私たちのことをあまり好いていないからでは…」
「…それもあるかもしれないけど、そうじゃないの」
不思議そうに首を傾げる皐月に、少し息を整えてから、リンは語る。
「コト、ずっと昔にね、悪言に襲われたことがあったの」
「え…、」
聞いていた颯火も息を呑んだ。そんな話は今まで聞いたことがなかった。
リンは小さく唇をかんで、哀しそうに言う。
「一緒に森で遊んでたんだ、よくやらない？　秘密基地とかいって、木のうろとかにいろんなもの持ち込んで遊ぶの。それで、ちょうどコトが一人で基地に居る時に、運悪く悪言と出くわしちゃったんだ。私が戻ってきたときにはもうコトは悪言に飲まれちゃってて、急いでお父さんを呼んで助けてもらった。怪我は無かった。でも、長い時間悪言に取り込まれてたから、心のほうが、無事じゃなくて…、その後から、知らない人に向かって悪口言ったり、嫌味なこと言ったりするようになった…。」
悪言に飲まれると、心が食われる。当時琴樹は押さなかったでしょうし、恐怖や不安による精神的な重圧は相当なものだったはずです。そこで抱いた絶望の分だけ、琴樹の中に悪言が蓄積していた。そして、おそらくその悪言の残滓が琴樹の性格や言動に影響を及ぼしているんでしょう。
琴樹の悪態によって、異常なまでにたやすく悪言が生まれるのも、きっとその所為。
「それまでのコトは、すっごく明るくて、泣き虫だけど優しくて、誰とでもすぐに仲良くなれてた。私もあこがれるくらい、本当にいいこだった。だから、変わっちゃったコトに、みんなすごく戸惑った。特に嬉津枝さんは、自分の息子が豹変具合にずいぶん参っちゃってて、『あの子は、本当はもう死

んじゃったんだ！』とか『あれは私の息子なんかじゃない、悪魔の子だよ！』って毎晩泣いてたみたい。それで、それをたまたまコトが偶然聞いちゃって…」

母親に自分の存在を否定され、人格を否定され、息子ではないと泣いている姿を、どんな思いで幼い琴樹が見ていたかは、想像に難くない。

「…それからどんどん、コトは大人の前ではいい子になろうとした。思っても無いこと言ったり、笑ったりして、《昔のコト》みたいに振舞った。私には昔のまま、話してくれてたのに、いつのまにか、私の前でもいい子なコトになってて…」

小さく唇をかんで、さびしそうに言うリン。

おそらく、颯火達が始めて凜と琴樹にあったころの話でしょう。あの時、琴樹は『リンに好かれるために自分の気持ちと性格を隠してる』と言っていたけれど、実は、彼自身も無意識のうちに『昔の琴樹』であろうとしていたのかもしれない。

嬉津枝に対して妙に謙虚で、従順であろうとしていたのも、その一貫だったんでしょう。

「そういえば、昔、コトね、嬉津枝さんの話を聞いたあとに、言ってた、『僕はもう頼野琴樹じゃなくなっちゃった、まがい物なんだ』って…、いい子になっても…コトが笑ってるからもう大丈夫なのかなって思ってたけど…やっぱり…だめだったのかな…」

「凜、お前が悪いわけではない…。きっと、誰の所為でもないよ…」

皐月は、声を震わせる凜の背中をなだめるように小さくたたいた。

琴樹がやっていることは、実はいたって普通のことなのかもしれません。

目上の人には礼儀正しく、好きな人にいい印象を持たせる。

誰もみな、無意識のうちにやっていること。本来の自分のまま、誰かに接する人はそういません。

けれど、今もきっと一人で苦しんでいる彼は、言葉遣いや態度だけでなく、別の何かを押し殺そうとしているのかもしれません。それも、自らの選択で。

そんな彼に、私達は何を言ってあげれるというのでしょう？

『『僕はもう頼野琴樹じゃない』…か、」

かみ締めるように葬屋がつぶやいた。

今も琴樹がそう思っているかは定かではありません。

けれど、悪言に侵食されながらも、《元の琴樹》のころの理性かあるいは良心というべきものが、《今の自分》と相容れないで居ることは、かつて悪言大量発生事件を起こしたときに語った屈折した心情からも、明らかでした。

あの時、颯火と葬屋は『本当のことを言え』といったけれど、果たして、本当の琴樹はいったいどちらなのか？

――――『まがい物なんだ』

「ちょっと、待ってください」

不意に声を上げたのは蒼慈だった。

「それって、…兄さんも…元の兄さんじゃないみたいじゃないですか…！」
悪言に食われ、性格のゆがみを代償に、生き延びた琴樹。
異魂である霜一と、ほとんど同じ境遇。
その琴樹が、自身を否定することは、すなわち、霜一の存在を否定することにもなる。
「そんなことは、許されない」
淡々と、しかし、力強く言い放って、蒼慈は静かに立ち上がった。
「僕、琴樹さんを探しに行きます」
「おい、蒼慈！　今は少しそっとしておいてやーー」
「琴樹さん『が何考えてようが』知りませんよッ！　これは『俺の』問題『だッ！』　慰めも同情もする『つもりなんかねぇッ！』　『あいつ程度の存在が』僕の兄さんを否定して『いいはず』ないんですよッ！」
つぎはぎの声で叫んで、葬屋の静止も聞かず、蒼慈はそのまま飛び出して行ってしまった。
「――まった話をややこしくしやがって…ッ！　空気読めよ、あのバカッ…！」
「俺達も行こう、葬屋」
「……ダメだ、行くべきじゃない」
颯火の手を振り払って葬屋は冷静に言うが、颯火は立ち上がり今にも飛び出しそうな勢いで叫ぶ。
「琴樹が悩んでるっていうのに、放っておけないだろ！」
「そっとしておいてやったほうが、琴樹のためにもいいはずだ」
「仲間が辛そうにしてるのに、黙ってろっていうのかッ？！」
「これは琴樹の気持ちの問題だろ！　俺達が行っても、あいつの負担にしかならない」
「手前はそれでいいのかよ！」
「仕方ないだろ、俺達は無力だ」
「葬屋ッ！」
颯火は肩をつかんで無理やり葬屋と目を合わせた。
「…『互いに本気で付き合う、我慢も遠慮もしない、嫌なことも隠さない、でも相手のことは絶対に見捨てない』…そうやって、俺のことひっぱりあげてくれたのは手前だろッ！　その手前が、何もできないなんていうなよ！　なんのための言葉だよッ！」
「……、俺は…」
「言葉には力がある！　無力なんかじゃない！　何もできないなんてことない、思考に詰まったとき、どうにかしてやれるのは他人だけだ！　琴樹に会いに行こう、葬屋」
葬屋は目を伏せて、答えない。代わりに、立ち上がったのは爆だった。
「俺は行く。とにかく、蒼慈は止めた方がいい。様子がおかしかった…、あれ、鶯は？」
「さっき、蒼慈が出て行った時に警戒してついていったぞ。その時式札を渡しておいたから、今、私の紙人形が、街中くまなく琴樹を探しているだろう。見つかれば、これで場所が分かるはずだ」

皐月はそう言って葬屋に『人型、これを見つける　即ち示さん』とかかれた短冊状の紙を手渡した。おそらく、昔颯火達を探し出したときに使ったものと、同じ紙人形でしょう。

「行ってこい。私は後から行く」

「葬屋、」

再度、颯火が訴えると、葬屋は颯火の手をゆっくりとのけてから、うなずいた。

「分かった、行こう」

И

日は当に暮れ、薄い月明かりがキンディネスを照らしている。街は昼間のお祭り騒ぎもどこへやら、街頭の光が点々と蛍のように揺れているだけだ。どこかの家からか、かすかに楽しそうな歌や音色が聞こえてくるが、それも遠い夢のようだ。

町外れの森の中にある一本の大樹。その枝の上で、琴樹はひざに顔をうずめていた。幹に移る影が、ゆらめいていた。

「琴樹さん」

木々の間から聞こえた蒼慈の声に、琴樹はけだるげに顔をあげた。

「…なんだよ、一人にしてっていったじゃん。なに、ストーカー？　趣味悪いね、」

「僕の兄さんは、『俺は、生きてる』」
「なに…突然、」
「悪言に飲まれて、性格が変わったって、たいしたことないじゃないです。琴樹さんは琴樹さんで、同じように、兄さんは兄さんです。そうですよね？　まさか、死んだなんてこと、思ってないですよね？」
ゆらりと、幽鬼のように樹にもたれかかる蒼慈。今にも切れそうな理性の糸をたぐってかすかに笑い、琴樹の肯定の言葉を待つ。しかし、
「……そっか、話、聞いたのか」
蒼慈の言葉に、状況を悟った琴樹は細くため息をつき、

「《頼野琴樹》は死んだ」

はっきりと―自分に言い聞かせるように―言った。
「あのときを境に、元の僕は死んだ。見た目が同じだけで、中身が全然違うなんて、もうそれは、同じ人間じゃないでしょ。僕は《頼野琴樹》役であって《頼野琴樹》じゃない、」
「そんなこと、そんなことないですッ！　琴樹さんは、今でもずっと琴樹さんでしょ！？　死んでなんかないでしょ！？　もし、死んでるとしたら…、僕の兄さんは―『俺はどうなるんだよッ！』」
「はあ？　何を今更」
糸がはずけたように狂気的に喚く蒼慈―霜一に対して、琴樹は淡々と言い放つ。
「お前も死んでるだろ」
さも当たり前のように放たれた言葉に、ぐらり、と霜一の姿が揺らめいたようだった。
その言葉は確かに言霊となって蒼慈に突き刺さり、信じて疑うことのなかった理念に確かに亀裂をもたらし、その存在を揺るがした。
まさに、《禁句》。
忘れてはいけない、どんな些細な言葉にも力があると、
『お前、ごと、きが、俺の存在を否定するなあああああッ！』
地面を思い切り蹴って飛び上がった霜一は、琴樹を木の上から蹴り落とし、胸倉をつかんだ。目を見開いて、手が震えている。そんな霜一に、琴樹は自嘲するかのようにからからと笑う。
「はは！　お前なんか、体も残ってないくせに、人格まで変わってよくもまあ《霜一》だなんて名乗ってられるもんだよ。何が魂だ、胡散臭い。その見た目だって、弟の映し身だろ？　何をとったって、お前はその《霜一》って名前以外、元の霜一とはまるで違う、ただの似せ物じゃないか！　はは！」
『黙れッ！　俺は、互井霜一としてここに居る！　お前だってそうだ！　死んでない！』
「そこまで言うなら、証明してみなよ」
嘲笑の響きも無く、声のトーンを落として、琴樹は淡々と、問うた。

「何をもって、《自分》だって言うのか、論理だてて説明しなよ。名前？　見た目？　《心》？　できるもんならやってみなよ！　僕にはできなかった…、僕にはできなかったッ！」
胸倉をつかむ霜一の手を引き剥がし、突き飛ばす。よろめき、何もいえない霜一を、琴樹は鼻で笑い、いつもの調子で言う。
「前からさあ、思ってたんだよね、馬鹿みたいだって。多重人格者のくせして、何が兄だ弟だ、ごっこ遊びもはなはだしいよ。そういうの、馬鹿真面目にやってるあたりお子様なんだよ！　そもそも、お前の兄貴は死んでるんだろ、死者が生き返るわけないだろ、頭腐ってんじゃねーーー」

「――それ以上言うなら、殺しますよ」

冷たい、鋭利な言葉を聞くよりも早く、銀色がひらめいた。
遅れてしびれるような痛みを感じる。琴樹は自分の頬に手を当てると、赤く血にぬれているのが暗闇の中でも分かった。
「は……？」
「兄さんを殺すやつは、誰だろうと、僕が殺します」
「おい、やめっ…！」
ナイフを握り締め真っ青で真っ黒な瞳を向けてくる蒼慈に、思わず後ずさりする。正気の沙汰では

ない。異常なほどに、迷いがない。おかしい。殺される。今の蒼慈は、殺しに来る。そう悟った。
蒼慈がその大降りのナイフを高く振り上げたその時、
「琴樹！」
突然の颯火の声に顔をあげると、鶯が鞘で蒼慈の手をはじき、ナイフを取り落とさせたところだった。それを慌てて拾い上げようとする蒼慈に鶯は容赦ない手刀をたたきこんだ。しかし、むせこみながらも蒼慈はナイフをつかんで鶯に飛び掛ろうとする。
「ぼ、く、の、じゃまを、するなあああああっ！」
「蒼慈、すまん！」
一言断って、爆は蒼慈を思い切り殴り飛ばした。宙に浮いた小さな体に、さらに容赦ない蹴りを叩き込んだ。わずかに口から血を吐いて、地面に倒れた蒼慈は、そのまま気絶し動かなくなった。
「琴樹、大丈夫か！」
「なんだよ、ぞろぞろと。うっとうしいな」
駆け寄ってきた爆の手をはたいて、琴樹は無理やり傷口をぬぐった。
「ていうか、やりすぎでしょ。あんなチビっこ相手に余裕ないね」
「ゼペットに、あいつが暴れたら容赦なくやれと、まえまえから言われているからな」
言って、横目に蒼慈を見る。鶯に抱き起こされてもぴくりともせず、ぐったりとしている。おそらく、ひどい精神的疲労もあったのでしょう。ナイフを取り上げられ、ひとまずこれ以上暴れることはなさそうです。
「で、何？　夕ご飯コールなら帰ってくれない？　僕、まだ少し一人でいたいんだけど」
「いや、俺達はお前と話をしに来たんだ、帰らない」
歩みでて、颯火ははっきりという。後ろに居る葬屋は、口を引き結び黙っているが、琴樹から視線をはずそうとしない。そんな二人に、琴樹はあからさまにため息をついた。
「なんだよ、どうせ、全部聞いたんだろ、話すことなんて何もない」
「琴樹、親とかリンの前で演技するの、やめろよ」
「なに、偉そうに。関係ないだろ」
「関係ある！　手前が、俺の友達の琴樹を傷つけてるのなんて、見てられるかよ！」
「傷つけてる？　何が？　これは僕が好きでやってることなんだ、とやかく言われる義理はないね」
「じゃあ、何で今日あんなに辛そうだったんだよ！」
「――――、」
颯火の追求に、琴樹の余裕な態度は消え去り、唇を強く噛んで、顔をそらした。またこぶしをぎゅっとにぎって、何か叫びだしそうなのをこらえて、搾り出すように、言う。
「……僕は母さんを悲しませたくないだけだ…ッ！」
「べつに、嫌ならいやだって、言えばいいだろ！　言いたいことを言えよ！　言葉遣いは、確かにあれだけどさ、それで自分の気持ちまで隠すなよ！　《台詞》ばっかしゃべってんじゃねえよ！」

「お前らに何がわかるっていうんだよ！　一番近しい、大好きな人といっしょに居るには、本当のことを話せない、僕の気持ちがァッ！」
「分かるよ！」
琴樹を一喝するように、颯火は強く言い放った。予想外の答に目を見開く琴樹に、颯火は息を整え、少しうつむきながらも、言う。
「っつっても、手前ほどじゃないけどよ。俺だってあったよ、母さんに心配かけなくて、ずっと嘘ばっか言ってた頃。すっげー哀しくて辛くて隠れて泣いてたよ。誰も俺が悲しいの知らないんだって、もっと哀しくなってさ、でも誰かと一緒にいるのが怖くて、ずっと一人で泣いてたよ！」
「……」
「でも、そんなの、葬屋が話しかけてくれて、全部変わった。悩んでるのがばかばかしくなった。一人でない頭絞って考えたってなんも変わらないけど、誰か一人の言葉で、変わるんだよ」
『友達になろう』
かつて、この言葉が颯火を変え、そして今に至る二人の絆の発端となったように、琴樹もきっと、
「誰にも自分の気持ちは分からないとか言って、他人の言葉から逃げてんじゃねーよッ！」
「……う、うるさいッ！　黙れ！　黙れよッ！」
「本当に何もかも昔と違うって言うのか！？　全部悪言にのっとられたわけじゃないだろ！　ちゃんとお前のなかに琴樹が残ってるだろ！　お前はまだ琴樹だろ！」
「頼野琴樹は死んだんだあぁ！」
「じゃあ、凜への気持ちも演技だって言うのか！」
「違う、分からない、でも、違う！　違う！」
頭を抱えてかぶりを振るう琴樹。
以前、琴樹が抱いていた、凜への相反する感情。もし、凜への疎ましさが悪言に飲まれた後の琴樹の気持ちなのだとしても、その嫉妬の元をたどれば凜が好きだという結論に、至ったのではなかったか？　だとしたら、それが本当の意味で、アイデンティティ、『琴樹の生きている証』なのではないか？
「でもっ、母さんに、本当のことなんていえるわけないよ…！」
「俺達には本当のこと言えてるじゃないか！」
「あんなの、あんなの嘘だ！」
叫ぶ琴樹の目はすでに、涙にぬれて赤かった。
「だって、僕は、お前達のこと、嫌いなわけじゃないから…ッ！」
涙交じりに語られるそれは、確かに、琴樹の《本心》の言葉だった。
「なんで…なんでお前らはそうやってさあ、そのままでもいいって言うんだよ…！　こんな嫌な奴いないだろ。最悪だろ。嫉妬して疎んで恨んで、人を貶すことで自我をたもつような汚い奴なんだ、僕は。こんな奴、殺しておいた方がいいんだ、元の僕みたいに、明るくて優しくて思いやりのあるいい子になった方がいいんだ…それなのに…なんでそのままでもいいっていうんだよ…ッ！　役も台詞も、

忘れちゃっただろ！　おかげで、また、母さんもリンも悲しませちゃったじゃないかあ…ッ！」
　その場に崩れ落ち、琴樹は嗚咽をかみ殺しながら、言う。そして、苦しそうに、胸を押さえる。何かを押し付けるように、絞め殺すように。
「こんな僕でも受け入れてほしいなんてさ、わがままずぎるんだよ！　殺さなきゃ、また悲しませる！　僕が我慢してればいいだけなんだ！　別に本当のことなんて伝わらなくなっていいんだよ！　クズな出来損ないの僕は殺して、《頼野琴樹》として生きていくんだ！　僕はー！」
　その時、琴樹の影が大きく揺らいだ。
「ダメだ、琴樹！」
　叫んだのは鶯だった。鶯は、見たことがあったのだ。揺らいだ影が立ち上がり、悪言となって、その人自身を襲い、食らう光景を――
　振り向いた琴樹の目の前には、自分に牙を向ける悪言の姿があって、動けないまま、

シャーーン

　甲高い、しかし耳に心地よい、鐘の音が響いた。
　悪言の動きが止まり、二度目の鐘の音の後、溶けるように消えてしまった。
　琴樹は音のほうへと、振り返る。月明かりの中、立っていたのは
「リン……」
「コト…ッ！」
　凜は握っていたハンドベルを放り投げて、琴樹に駆け寄り、抱きしめた。地面に落ちたベルが小刻みに鳴り響き、凜は音もなく涙を落とした。そして、より強く琴樹のことを抱きしめ、歌うように、言う。

「《私、今のコトが好きだよ》」

「……嘘だ」
「コトは、昔からずっとコトだよ…、何も変わってない、優しくて人が大好きでよく笑う男の子…」
「嘘だ…！」
「優しいから、悪い自分のことが許せないだけ…、本当は、何にもかわってないんだよ…！」
「嘘だああ…、嘘だよ……僕は…」
　泣きながら凜の言葉を否定し続ける琴樹を、凜は守るように抱きしめる。
「お願い、私の大好きな琴樹を殺さないで…っ！」
「……、僕は…、」
　涙でぼやけた琴樹の視界、凜の肩の向こうに、もう一人、誰か立っているのが見えた。

「琴樹、」
それは、皐月につれられてやってきた、嬉津枝だった。彼女は、静かに息子の名前を呼んだ後、ゆっくりと歩み寄り、
「悪かった」
そう言って、琴樹の頬をなでた。
「ゼペットから聞いたよ、全部。あの悪言も、自分の中の悪言と向き合うためのものだったんだろ？なのに、化け物遣って調子に乗るな、なんてさ、偏見もいいところだ。冷静な判断ができてなかった、商人失格だね。」
「え…、ちょっと待って、ゼペット？」
「ああ、さっきうちに来たのさ、『お話があります』ってね。なんだい、颯火くんらと一緒にきたんじゃないのかい？」
そんなことは—悪言のこともゼペットのことも—初耳でした。
しかし、ゼペットによる話が、頑固になっていた嬉津枝に息子の姿を見つめさせ、親子の間の亀裂を急速に埋めていったのは、確かでしょう。
「お前を良く見てあげられなくて、ごめんよ。無理させちゃったな。言葉遣いなんて薄っぺらいものばっかで…。でもね、私は、お前にもう危ないことをしてほしくなくて、心配だったんだ。そこだけは、わかってほしい…。私は、お前を失いたくはないんだよ…！」
「……っ！」
「何が変わろうと、お前は私の大事な息子だ。天地がひっくり返ったって、それだけはゆずらないよ」
「……あ、か、…かあさん…ぼ、く……ッ！」
凜がそっと琴樹から離れると、琴樹はそのまま嬉津枝に抱きついて、声を上げて泣いた。ごめんね、と嬉津枝はもう一度小さくつぶやきながら、優しく息子の頭をなで、抱きしめた。それはおそらく、何年か振りの、本当の親子としての抱擁だった。
「……いいな、かぞく」
かすれた声でつぶやいたのは、蒼慈だった。鶯にもたれながら、薄く開いた目はじっと琴樹達親子の姿をみつめている。
「……ぼくには、…ずっと、にいさんしか、いなかったから…」
「……、」
鶯も、無言のままに蒼慈の視線を追った。表情はぴくりとも動かないが、どことなく、羨ましそうに、二人の様子を見ていた。
そんな、鶯と蒼慈の肩を抱いて、爆は豪快に笑った。
「何言ってんだ、俺達は家族だろッ！」
バシバシと力強く肩をたたく爆に、蒼慈は苦笑しながら、つぶやいた。
「そう、ですね…」

И

「あー！　キンディネスともお別れかーッ！　移籍してえ―！　住民票うつしてえー！」
「あきらめろ、俺達の住処はマイナスイオンあふれる深緑の森じゃなく、人にあふれるコンクリートジャングルだ」
颯火と葬屋は、駅からもう一度キンディネスの景色を眺めた。
琴樹と嬉津枝が和解した翌日、琴樹家では盛大に誕生日パーティーが開かれた。正直物語の長さも相当な感じになってきたので内容は割愛しますが、案の定、にぎやかを通り越して騒がしいパーティーとなり、場外乱闘になったりならなかったりしました。琴樹は嬉津枝の前でも颯火や葬屋に対して暴言を吐きまくっていましたが、嬉津枝はそれを諌めはするものの、以前のように殺伐とした様子はありませんでした。
ちなみに、琴樹パパこと楽揮はというと、
「うん、なんだか、二人とも、なかよくなったみたいでよかったよ。僕は何もできなかったなー」
と、能天気に笑っていましたが、どことなく、琴樹と嬉津枝の間の軋轢について知っていた様子でした。彼も、凜と同じように、琴樹のことを心配していたのかもしれません。
そうこうしている間にも時は過ぎ、キンディネスを発つ日がやってきた。

観光気分の抜けない一行は、キンディネスの美しい景色やおいしいご飯に未練たらたらの様子でしたが、あまりタームを離れるわけにも行きません。なくなく、列車に乗り込み、窓から見える景色を目に焼き付けようとしています。
「あ、あの、コト！」
不意に見送りに来ていた凜が、列車に乗ろうとする琴樹を呼び止めた。
「ん、何？」
「えっと、あの、おとといのことだけど…、あの『好き』っていうのは、その、友達としてってことだから、その、大丈夫だよ！」
「――――――――――、」
いや、何がだよッ！　そんな補足いらないよ！
せっかくモノローグも気を利かせて何も言わなかったフラグを抜かりなくへし折る凜に、琴樹は笑顔のまま停止。
そこまで入念にフラグを折ってくると、違うとは分かっていても、よもや嫌われてるのではないかとすら思いますね。
琴樹は苦笑しつつため息をついて、そのまま深呼吸。
「……でも、僕はリンのこと、好きだよ」
「え？」
そう小さくつぶやいて、琴樹はリンを見据える。
じっと、狙いを定めて、

「これは、友達として、じゃ、ない、から」

若干裏返った声で告げると、琴樹はキレのある動きで回れ右。じゃあね！と振り向かないまま手を振って、列車に駆け込んだ、というか逃げ込んだ。
……、今、歴史が動いた…！
両親とのいざこざを乗り越えて、琴樹もどこか成長したのでしょうか。
――どこかで小さな発砲音が聞こえた気がした。

『私、今のコトが好きだよ』
あの一言で琴樹の中で何かが大きく変わったように、
放たれた琴樹の言葉は、きっとまた何かを変えて、新しい始まりを告げるでしょう。

発車のベルが鳴り、列車が駅を離れていく。
立ち尽くす凜の髪を風がさらう。
押さえた髪には、小さな宝石をあしらった髪留めが光っていた。

【the word changes the world.】